

提出年 2001年度

主査 坂爪洋美先生 副査 天野みどり先生

題 「日本人の〈甘え〉を知る

—心理療法の場における〈甘え〉の考察を通じて—

学籍番号 97D101

氏名 阿久津景子

キーワード 「日本人」「文化」「甘え」「心理療法」「依存」

日本人の「甘え」を知る
—心理療法の場における「甘え」の考察を通じて—

2001年度卒業論文

主査 坂爪洋美先生 副査 天野みどり先生

人間関係学部人間発達学科 学籍番号 97D101

阿久津 景子

<目次>

- 1) はじめに
- 2) 「甘え」という語
 - 2-1 日本語に特有の「甘え」
 - 2-2 「甘え」の言語的起源
- 3) 「甘え」理論
 - 3-1 「甘え」とは何か
 - 3-2 「甘え」の周辺の語彙
 - 3-3 「甘え」は日本だけのものか
- 4) 「甘え」理論と他の理論
 - 4-1 「甘え」理論とマイケル・バリントの理論
 - 4-2 「甘え」理論とアブラハム・マズローの理論
- 5) 「甘え」の現象
 - 5-1 「甘え」の経験の分析
 - 5-2 「甘え」と精神病理
 - 5-2-1 「甘え」とアンビバレンス
 - 5-2-2 「甘え」とナルシシズム
 - 5-2-3 日本語と精神病理と「甘え」
- 6) 「甘え」という語の存在
- 7) 心理療法の場における「甘え」
- 8) インタビュー調査による仮説の検証
 - 8-1 インタビュー調査の目的と構成
 - 8-2 インタビュー調査の結果
 - 8-2-1 結果<1>

8-3 考察

1) はじめに

ある言葉がその言語に存在する、ということはどれほどの意味を持つのだろうか。日本で生活していると、その意義に気がつきにくいと思う。

大学2年を修了した後、私は幸運なことにドイツに滞在する機会に恵まれた。ドイツをはじめいわゆる欧米諸国は、日本とは異なり個人主義の国である。私もそのことは心得ているつもりだった。しかし実際の生活は、予想していたよりも困難だった。なぜなら、私の日本人としての「常識」が通じずとまどいを覚えたからである。私は個人主義を勘違いしていたらしく、世界共通の「常識」があって、欧米の国々ではそれに加えて個人の自由がより尊重される、そう思い込んでいたのだ。それは間違いではないが、それに加えて私の頭の中には無意識のうちに「日本の常識 = 世界の常識」という図式ができあがっていたのだ。そのことが、ドイツでの生活への適応を困難にした。確かに世界共通の「常識」はあるだろうけれども、それはモラルのレベルであって、日常生活の習慣における「世界の常識」などはない。だが、その認識が私には欠けていた。欧米の個人主義とは単に個人の自由が尊重されるというだけではなく、同時にその自由に責任を負わなくてはならないのだ。

具体的なことをいえば、何につけても自分の意志や希望を述べなければならないことである。土居健郎氏もその著書『「甘え」の構造』の中で、アメリカ人はあたかもそうすることで自分が自由であることを確かめでもするかのようになり、小さなことでもいちいち選択したがると述べている。今自分は何をしたいか、何を考えているか、どれを食べたいか等、自分のことは自分で決め自分が伝えたいと思ったことは自分から発言する、その自由と責任を欧米人は負っているのである。

例えば、客を家に迎えた時のもてなしの場面を想定しよう。日本でのごく一般的なもてなしを考えてみれば、客のために飲み物を用意して、食事を取り分けて、酌をするのが普通である。別の言葉でいえば、客の行動や素振りから相手の要求をくみとって、客が要求する前にそれを満たそうとする。それが、ゆきとどいたもてなしであるといえる。それらは「気を配る」「気をつかう」などと表現することができる。

一方欧米ではどうか。欧米でのもてなしの席では、料理は一度分けられた後、大抵大皿にのせてテーブルの中央に置かれる。飲み物は、もてなす側に何か意図があって特定のものを勧める場合もあるが、大抵はその選択は客にゆだねられる。ワインか、ビールか、水か、水ならば炭酸入りか炭酸無しか、などであ

る。そしてそれらの飲み物も、やはり料理と同じようにテーブルの上に置かれる。日本でもてなしと考えられる酌は、したとしても初めの乾杯のためだけである。あとは各人手酌で飲み物をつぐ。それは失礼なことにはあたらない。彼らにいわせれば、「飲み物を飲むペースはそれぞれみんな違うのであって、より快適に感じられるよう自分で調節すればよい。」のだそうで、だから手酌が基本なのである。飲み物や料理をテーブルの上に置くのはひとつのサインであって、「ここにあるものは自由に取ってよいですよ。」ということを示しているのである。どうすれば客が心地よく感じるかは客本人にしか分からない、と彼らは考えている。したがって客にいかに自由に飲食させることができるかを、もてなしの基準と考えるのである。

この例ひとつをみても、その考え方は日本と欧米では違うことが分かる。この違いを、私は理解していなかった。ある日ドイツ人と食卓についていた時、私の皿にだけあるものが取り分けられなかった。どうやら母親（ホスト・マザー）が忘れたようだった。私はそれが欲しくて仕方なかったが、それを口にするにはなんだか厚かましいような気がして、言えなかった。そのうち母親か誰かが「気がついて」、私に取り分けてくれることを期待していた。しかしそれは無駄だった。誰も気がついてはくれず、そのまま食事は終わってしまった。なんと気のきかない母親なのかと私は心の中でひそかに憤慨していたが、徐々にドイツの生活に慣れていくにつれて、そういう態度も理解できるようになっていった。

そしてその後、ふとしたきっかけで私はあることに気がついた。いつになっても彼らに「気を使ってしまう」私の気持ちを説明したくなり、和独辞典で「気をつかう」という動詞を調べた時のことである。「気をつかう」は、辞書に載っていなかった。そこで「気」の項目を調べてみると、besorgtが「気を配る」の訳にあてられていた。だが besorgt を独独辞典で調べると、子供などが病気にならないよう配慮する、心配するというニュアンスしかなく、私が求めていたような「相手の要求に敏感になる」という、より一般的な意味合いはなかった。次にドイツ人の友人にこの事を説明し、いったいこういう気持ちはなんと表現したらよいのかを尋ねた。すると彼は、それは aufpassen というのだと教えてくれた。再び独独辞典を参照すると、aufpassen は、事故などにあわないように注意する、慎重に行動する、周囲をよく観察するなどの用法で説明されていた。しかしやはりそれだけでは、「気をつかう」の適当な訳語としては不十分であると感じた。

この体験の後から、私はドイツでの生活に以前よりも違和感を感じなくなった。それは、私にとってドイツの文化がより許容できるものになったからといえる。「気をつかう」に相当するドイツ語は存在しないようだという事実は、

ドイツ人にとって私の考えるような「気をつかう」行動が理解しがたいことの説明になった。そして彼らは「気をつかう」という言葉を持たないのだから、「気をつかう」行動がとれないのも仕方がない、と私は納得できたのである。

ここから私にひとつの疑問が生じた。言葉とメンタリティーの関係である。はじめにその民族固有のメンタリティーがあり、それに合わせるように言語は発達するのだろうか。それともある言語を繰り返し使用することで、その言語に代表されるようなメンタリティーが育っていくのだろうか。これは一見ふたつの対照的な見方のように見えるが、実は次元の異なる問題である。メンタリティーから言葉が生まれるという発想は、言語発生の起源から検証するべきものであり、縦断的な研究が必要である。一方言語の使用がメンタリティーの形成に奇与するという考え方は、例えば帰国子女達のメンタリティーを調べることである程度証明できるように、横断的な研究が必要である。言語は社会や文化を代表するものであるから、それを使いこなすということは、その社会に適応できるメンタリティーを身につけることである、と私は考えた。結果、「言語の使用がメンタリティーを形作る」と仮定したのである。

その後、私は土居健郎の『「甘え」の構造』という本に出会った。そこでは、土居氏が私と同じようなカルチャー・ショックの体験をしたことが書かれていた。そして根本的には「甘え」がそのカルチャー・ショックの原因であったこと、「甘え」の語が日本語に特有のものだということ、これらの理由から、彼は「甘え」の言葉に着目して論を展開した。その著作の中で土居氏は「すねる」「ひがむ」そして「気にする」など甘え以外の言葉が、甘えの心理で説明できることを示した。このことから、「甘え」は日本人のメンタリティーの中核をなす語であると結論づけた。ある言語の使用によって特定のメンタリティーが形作られるかどうか、という私の仮説は「気をつかう」の語から始まった。だが彼のいう「甘え」は、「気をつかう」をも包含する概念であることが分かったので、では一体「甘え」とは何か、どのような現象を指すのか、誰が「甘え」て誰が「甘えられる」のか、どこでみられる現象なのか等、私は「甘え」についてさらに調べていくことにしたのである。

既に述べたように、土居氏は「甘え」を日本人のメンタリティーを説明する語であると位置づけた。また彼は精神分析医であったので、ナルシシズムなどの精神病理の概念も甘えを用いて説明することを試み、「甘え」の概念が精神療法にも適用できることを示した。だが「甘え」がもともと学術用語ではなく日常語であることから、その定義をめぐる論争がおこった。また「甘える」者の甘え心理だけではなく、「甘えさせる」者にも実は甘えの心理は働いているなどの、様々な視点からの「甘え」が論じられた。

以上の事柄を調べていくと、「甘え」の一語は様々な形態をとる包括的な概

念であることが明らかになる。もともと私の調査の動機である、「気をつかう＝相手の要求をくみとる」も、「甘え」のひとつの形態だと説明できる。つまり「言わなくても分かってあげるよ」または「分かってあげよう」という、相手の「甘え」を受けとめようとする姿勢だということである。その姿勢を示すことで、甘える側は安心して相手の言動に「甘える」ことが出来るのである。そこで、実際にこの「甘え」の感情を日本人はどのように体験するのかを、インタビュー調査により検証する。

調査の対象として、心理療法の場におけるセラピストとそのクライアントを選んだ。検証の目的は「日本人はどのように甘えを体験するか」であるが、その対象にセラピストとクライアントを選んだのには、2つの理由がある。ひとつは、こころの病をわずらうクライアントは、土居氏によれば何らかの形で満たされない甘えを経験しているのだから、転移感情も含めて、「甘えの感情」をより表出しやすい状態にあると推測したからである。ふたつめは、セラピストであれば一般の人々よりも「甘え」に敏感だと考えたからである。これはセラピストであれば一度は土居健郎の「甘え理論」を耳にしたことがある、という推測に基づいている。もともと心理療法の理論は欧米で生まれたものであるから、それらの理論の中に「甘え」の言葉は見られない。しかし「甘え感情」を知っている日本人セラピストは、おそらく意識してか無意識のうちかにそれらの理論をある程度日本人に合うように、つまり「甘え」の感情をも考慮して適用してきたと考えられる。そして土居氏の「甘え理論」は、体系的に「甘え」感情を記述している。したがって土居氏の理論は、これまでセラピストの中で漠然としていた「甘え」への理解を、より深める手助けになり得たと考えられる。セラピストが一般の人々より「甘え」に敏感だと考えたのは、そのためである。

私の言葉への関心は、「気をつかう」という言葉に相当する訳語がドイツ語に見あたらないことから始まった。そこで考えたのは、「なぜドイツ語にこの言葉がないのか」だったが、しかし同時に「ではなぜ日本語には存在するのか」という疑問も生まれた。土居氏の理論は、この私の質問に答えるものだった。「気をつかう」も彼の「甘え」概念で説明できる現象であり、「気をつかう」は、甘えの結果生じる種種の現象の内のひとつなのである。そしてその（「気を使う」を含む）「甘え」は、日本で重要な役割を果たすからこそ、言葉として存在するのである。

それでは、実際に日本人はどのように「甘え」を体験するのだろうか。これを検証するために、心理療法を行うセラピストへのインタビュー調査を実施する。「甘え」の発現する状況をセラピストとクライアント間に限定して、「言わなくても分かってほしい」という甘えの一形態に着目する。調査で明らかにしたい事柄は3つあり、1つは、「言わなくても分かってほしい」という甘え

をセラピストはどのように、またどのくらい体験するのか、である。2つ目は、「甘え」は日本に特徴的なものだという仮定から、本当に日本人は日本人以外の人々よりも「言わなくても分かってほしい」という甘えを表現しやすいのか、である。セラピストが日本人以外にも心理療法を行った経験があるならば、実際そのような違いが見られるのかを質問し、「言わなくても分かってほしい」という「甘え」が本当に日本人に特徴的なものなのかを明らかにする。土居健郎氏は、日本では「甘え」が適切に満たされることが必要だと述べている。では、適切に満たされないとはそれは現実にはどのような結果をもたらすのか。それが、明らかにしたい3つ目の点である。もともと心理療法ではクライアントの言語化が重要だとされているので、心理療法の場はしたがって「言わなくても分かってほしい」という感情を時に受け入れないこともあると推測される。したがってセラピストは、クライアントの「言わなくても分かってほしい」という「甘え」を、適切に受けとめられないこともあると考えられる。甘えが適切に受け入れられない時、どのような弊害が起こるのか。以上述べた3点を、インタビュー調査により明らかにする。

2) 「甘え」という語

2-1 日本語に特有の「甘え」

『大辞林』(1995)には、次のように載っている。

- ・「甘え」 甘えること。甘える気持ち。
- ・「甘える」 物をねだったりかわいがってもらおうとして、ことさらになれなれしく振舞う。甘ったれる。例「親に甘える」
人の好意・親切をえんりょなく受け入れる。
人の好意・親切をあてにして、気ままに振舞う。
いい気になる。
例「お言葉に甘えてお世話になります」
甘い香りがする。例「いと甘えたる薰き物の香」
恥ずかしく思う。てれる。
例「いとはしたなくののしりければ、甘えて出にけり」

土居健郎(1971)によれば、「甘え」に相当する英単語はないという。彼は自説を英語で発表する際(1973)に、甘えを dependence と訳している。しかしそれは後に彼がいうように翻訳上やむを得ずそうしたのであって、これは誤解を招くこともある、という。dependence は逆に日本語にすると「依存」に

なる。したがって dependence という訳語をあてることで、読者に「甘え = 依存」というイメージを与えることになるからだ。彼自身「甘え」の中には確かに依存の要素がみられる、そのために dependence を用いたのだと述べている（1988）が、決して甘えは依存とイコールではないとしている。

また土居氏は甘え以外のいくつかの言葉、例えばひがむ、すねる、気を用いた言葉等も、それを訳すに適切な英単語は見つからないという。もしそれらの語を英語にするならば、文章にして説明せねばならないという。「甘える」ならば to depend and presume upon another's love（土居 1988）といった具合である。これは一体どういうことだろうか。彼はまず「甘え」の言葉に注目し、「甘え」という感情でそれら他の言葉は互いにつながりを持つことを説明した。そしてこの中心にある「甘え」という単語が英単語にはないことから、それに付随する感情を表す単語もないのだ、とした。

土居氏によれば、欧米語にはどれにも「甘え」に相当する語はないという。そこで例としてドイツ語の場合を考えてみる。

和独辞典には、「甘え」の単語は載っていない。大辞林には「甘え」は「甘えること」と記載してあるので、代わりに「甘える」で引くと、「甘える」は schmeicheln, umschmeicheln, verwöhnen, verlassen が例文と共に紹介されている（郁文堂和独辞典 1996）。そこでそれぞれを独辞典（DUDENVERLAG 1988）で調べてみる。

まず schmeicheln であるが、schmeicheln は上記の「甘える」定義 と を満たしている。これは実物よりよく見せるが原義で、そこからおだてる、こびる、子供が親に甘える等の意味が派生する。子供が親に甘えまといつく意味もあるし、人をおだてていい気にさせる意味もある。したがって と に値するといえる。だが、これらはある目的のための具体的な行動を指す言葉であるので、甘える本人はそのことを意識している、という点で「甘える」よりもその意味する範囲が狭まる。「甘え」感情による行動（=甘えること）は本人に意識されない場合もあるから、schmeicheln が「甘える」の表すもの全てを含んでいるとはいえないのである。次に umschmeicheln だが、これは schmeicheln をの意味をより限定した状況にあてはめた語である。接頭辞 um- は、何かの周りという意味を付け加える。すなわち誰かを取り巻いてこびる、おだてるなど 誰かの周囲で schmeicheln の行動をとるわけである。より限定された意味を表すので、umschmeicheln も schmeicheln と同じく、「甘える」の表すもの全てを含んではいないといえる。

次に verwöhnen であるが、これはもともとは甘やかす、ぜいたくをさせる、わがままに育てるなどの意味を持つ。したがって「甘える」を表すには Ich lasse mich gern verwöhnen のように、ある特定の表現で表さなければならな

い。確かに *verwoehnen* も、相手の好意に甘えるという「甘える」の一形態である。大辞林の定義では に相当する。しかし「甘える」は相手の好意を求める感情、すなわち相手の好意が存在するかどうかまだ明らかでない状態においても使われる。一方 *verwoehnen* は既に相手の好意が存在する上で、「私はそれを喜んで受けます」という意志を示す表現である。したがって「甘える」の方がより広範な意味を表すことになり、*verwoehnen* も「甘える」の意味の全てを含んではいないといえる。

最後に *verlassen* だが、これはひとりにさせる、ゆだねるなどの意味を持つ。この場合は自分を相手にゆだねる、から転じて「信頼する」の意味になる。「甘える」に値する例文を挙げると、 *Ich verlasse mich auf seine gutmuetigkeit* がそれである。だがこれも相手の好意を信頼するという意味なので、既に相手の好意が存在することになり、先の *verwoehnen* と同じく「甘える」の全てを表せない。

以上のことから、ドイツ語には「甘える」の意味するものを全て含む語はないといえる。「甘え」＝「甘えること、甘える気持ち」であるから、もとより辞書に載っていないことから想像できるが、「甘え」に相当するドイツ語はないと結論することができるであろう。

2-2 「甘え」の言語的起源

「甘え」は日本語に特徴的な語であることが分かったが、では、「甘え」の語はいつから日本人に使われていたか。そしてその語はどこに由来するのか。それについてはいくつか説があるので、ここで紹介する。

土居健郎(1971)は、「甘え」の起源について二つの仮説を挙げている。

ひとつは、乳児のウマウマというなん語と関係があるのではないかという説である。彼によれば、甘えは本来乳児が母を求める感情を指す。乳児が母を求めることは乳を恋う気持ちであるとし、乳＝ウマウマで表現されるウマが甘えのアマへと変化し言葉として用いられるようになった、という説である。

もうひとつは、「天」のアマから来ているのではないかという説である。母を求める気持ちはさらにその対象を広げ、自らに恵みをもたらすもの全てへと向かう。その象徴が恵みをもたらす天であることから、天の「アマ」から「甘え」の言葉が生まれたという説である。

土居は「甘え」を日本語に特有の語といい、「母を求める気持ち」を表す言葉だと解釈して、そこから「甘え」の語源を考えた。竹友安彦(1988)は、それに対し批判的な立場をとる。土居は「甘え」が日本人に特有のものだということをも主張し、日本人の特性の全てを「甘え」でもって説明しようとしている、

言い換えれば「甘え」の語の起源を疑いなく日本に求めようとする態度に対して、彼は批判的である。日本語以外の諸言語にも「母を求める気持ち」を表す語はあるとし、その例として、母そのものの呼称である「ママ」をとりあげている。

ラテン語起源の諸言語で母を表す語、例えば mother(英)、maman(仏)、mamma(伊)、madre(西)などにある "ma" は、「子供が母の乳房を求めて泣く声に由来する模倣的な語根(The American Dictionary)」であり、これはラテン語の mamma(乳房)、または恐らくギリシャ語の maia(良き母および乳母ないし産婆)に由来する(The American Dictionary)という。これは、それらの言語圏においても、乳を求める幼児の動機と「ママ」という呼びかけとに関係があることの説明である。そしてその起源はラテン語またはギリシャ語であることを示す。

竹友はこのことを基に、「ママ」と同じように「甘え」の「アマ」も母を意味していたかどうか、意味していたならばどの地域においてなのかを調べることで、「甘え」の起源を見つけようとした。彼によれば日本で女性を表す「アマ」は、下層階級の母を意味する沖縄語の「アマ」と、女性を軽蔑した表現の東京方言の「アマ」があるという。しかし彼は「甘え」の「アマ」の語源はインド・ヨーロッパ系の言語にある、との仮説を立てた。

仮説はふたつあり、ひとつはサンスクリット語を起源とする説である。サンスクリット語には Amba と Pali Amma があり、共に母を意味する。これらは、日本に渡来し「尼」の語になった。彼によれば尼には老婦人が多くその人々への尊敬の気持ちから、日本においても尼が母を意味したこともありうる、という。

そしてふたつめは、ポルトガル語を起源とする説である。ポルトガル語の ama(女中、子守、乳母)が、中世のマカオから日本駐在の西洋人を介して日本に渡来した。そして同じく、女中や乳母などの意味で用いられたらしい。

竹友はこれらふたつの仮説から、「甘え」の「アマ」は日本語ではなくもとはインド・ヨーロッパ語に起源をもち、それが日本に伝来したのではないかと推測している。

3) 「甘え」理論

3-1 「甘え」とは何か

「甘え」という語は日本語に特徴的な語であり、その背景には母を求める気

持ちがあるということだが、それでは「甘え」とは一体何を意味するのか。

土居（1971）は「相手の好意を失いたくないという心理」と定義した。そこで問題になるのは相手の好意であり、自分はいくまで受け身で享受する立場にある。したがって「甘え」の結果は相手次第ということになる。そこで土居は「甘え」を、「受け身的に愛されたい動機」とも説明した。

「甘え」を「受け身的に愛されたい動機」と表現したことで、その後土居の理論は批判を受けた。「甘え」は動機のみを表す語と定義している、と理解されたからである。竹友（1988）はこう批判している。「甘え」は動機のみから成り立つものではなく、甘える人と甘えられる相手、両者の関わり方、関わり方を規定する規則、の三つから成り立つとした。だが土居の考察にはへの言及が少なく、またの視点が欠けていると指摘した。「甘え」はその動機のみでなくそれに伴う相互の関わり合いをも指す。しかし、土居は動機と関わり合いとを分けて考察していない。したがって土居の「甘え」定義は、動機の面だけを強調する不十分なものである。この批判に基づき、竹友は「甘え」と表現される関わり合いの性質を検討した。そして、「甘え」を「関わりあう二人の合意のもとに常識的な日常生活の常規の社会的拘束から一時的に解放されることを指し、甘えはそのようなコミュニケーションの様態を表すメタ言語」と定義した。常規の社会的拘束からの解放とは、子供の「甘え」であれば、年齢にふさわしくないような言動を、成人の「甘え」であれば、その状況においてはふさわしくないような言動をとることである。竹友の言う「甘え」とは、それらの言動が当人同士の合意のもと行われる状態である。ただしこの場合の合意とは必ずしも文書や口頭で交わされるものではなく、甘えられる側にその言動を許容する用意があり、甘える側もそれを認識している状況のことを指す。

この批判を受けて土居（1998）は、動機と関わりあいをはっきりと分ける竹友に対し反論している。動機は関わり方を前提とし、関わり方は動機を前提とするから「甘え」はそのように区別されて考えられるべきものではない、という。また「甘え」は日常語であるので定義から入るべきではない、とも述べている。竹友は土居の「甘え」に関する諸説明が「甘え」の定義をあいまいにしているというが、逆に竹友のように「甘え」の議論を定義から始めようとすると、その意味を限定してしまうことになる。それは日常語である「甘え」にはふさわしくない。日常語の意味検討には、実際に使われている状況に基づき分析する必要があるのであって、はじめに定義がありそこからはずれた使用を排除するようなやり方は、適当でないからである。実際、竹友の定義に合致しないような「甘え」も存在する。例えば、わがままで頑固なふるまいをする者に対してそれを見ている第三者が、「あいつは甘えているんだ」という場合の「甘え」である。この時当の本人に、甘えているのではないかと尋ねても「甘えて

なんていない」という答えが返ってくるのが予想される。こういった場合は、竹友の定義に当てはまらない。なぜなら、「関わり合う二人の合意」はみられないからである。そこに「甘え」を許容する雰囲気は感じられず、どちらかというところ、「常規を逸脱した」行為に対する「相手の同意を求めている」という状態に近いからである。それにもかかわらずその状況は、「甘えている」と表現される。はじめに定義があって、それに合うかどうかを検討することは日常語においてはあまり意味がない。ある状況で使われて、その意味が相手に通ずる事実の方が、より重要なのだと土居は述べている。

このように土居は竹友の定義の仕方に反論した。しかし、竹友の「動機」と「関わりあい」を分けた考え方が、甘えにいくつかの水準があることを明らかにしたのは事実である。竹友（1997）は土居の反論を受けて、甘えを「精神的甘え」と「対人行動的甘え」のふたつに分けるべきで土居の「甘え理論」は「精神的甘え」の考察に留まっている、と再び反論した。この主張に即して考えれば、1988の批判で彼は、甘えを「対人行動的甘え」に偏って考察していることが分かる。したがってこの新たな反論は、彼のいう「土居の甘え理論」である「精神的甘え」にも目を向けた、より視点を広げたものといえる。

甘えの水準に関して手塚（1997）は、「甘え」は3つの段階を経るプロセスであると述べている。彼女によれば「甘え」とは、まずその欲求があり、その後その欲求を満たすべく行動がとられ、その結果感情が体験されるという一連のプロセスのことである。しかしこれら3つはそれぞればらばらなのではなく、そのプロセス全体がひとつのゲシュタルトとして「甘え」と表現される。

山口（1997）は、「甘え」を「不適切な行動と、それが受け入れられるという期待」と定義した。不適切な行動とは、その場にふさわしくない行動を指す。竹友の定義と異なるところは、不適切な行動が相手に許容されるかどうかは問題にしていないことである。つまり甘える本人は、その行動が本当に許容されるかどうか分からないが、それを期待して行動するのである。この定義では、先に述べた「甘えている本人がそれを甘えと考えていない」場合の例を説明できる。なぜなら、甘えている本人と甘えられる側の間はその言動についての合意は存在しないが、甘える側がそれを期待して行っているとは考えられるからである。しかしこの定義では、土居のいう「乳児の甘え」が説明できない。「乳児の甘え」とは、乳児が母親にすぎるような様子を見せて、母親が「この子はもう甘えている」と感じる「甘え」である。土居（2001）によれば、乳児がそのような「甘え」を見せ始めるのは生後一年の後半頃からだという。だがそのような「甘え」は、不適切な行動とはいえないのでこの定義では説明できない。この乳幼児の「甘え」について山口は、「甘え」は対人行動に関するしつけから始まるので、それ以前の段階にある乳児に対して使うのは無理がある、とし

て考察の対象にしていない。

土居は当初（1973）甘えを「受け身に愛されたい動機」としたが、それに補足したのが岡野（1997）である。岡野は、「甘え」は「能動的な意味で受動的な情緒的交流」であるとしている。「甘え」それ自体は受動的なものへの期待であるが、甘える人は、甘えられる人や状況を積極的に探すという意味で能動的である、という。土居自身も「甘え」は「受け身に愛されたい動機」と単純に言い換えられるものではなく、そこにはある種の積極性がみいだされる、と述べている。

また土居（1989）は「甘え」を、「健康な甘え」と「屈折した甘え」に区別している。健康な甘えとはその甘え感情のたしかな受け手がある場合の甘えであり、屈折した甘えとはたしかな受け手のいない甘えである。また「健康な甘え」が生来のものであるのに対して、「屈折した甘え」は、素直な甘えが受け入れられず、別の甘え方を模索した結果学習された「甘え」である。言い換えれば、二次的な甘えといえる。「屈折した甘え」は、このように甘えが適切に受容されなかった時に生じる。「健康な甘え」と「屈折した甘え」の現れ方の違いは、前者が子供らしく、無邪気で、落ち着いているのに対して、後者は、子供っぽく、わがままで、要求がましい。例えば、「あれを買って」とねだる幼児に買い与えてもすぐそれに飽きて、次には「これも買って」と違う物をねだるような態度がそうである。辻村・又吉（1996）によれば、そのような甘えは自分の内部から自然にわき上がってくるものではなく、しばしば他人の行動から学習した「甘え方」に基づいている、という。

今まで述べたきたことをまとめると、「甘え」とは、「受身的に愛されるために相手の好意をもとめること」を表しており、それは欲求・行動・感情の3つの水準で語ることができる。また「甘え」は2種類に分類でき、それは「健康な甘え」と「屈折した甘え」の2つである。

では、人は誰に「甘える」のか。土居の「甘え理論」では一方が他方に甘えるという関係性をもとに話を進めているが、ではどちらが甘えていると判断できるのか。土居の理論では例えば幼児と母親の間で見られる「甘え」の場合、その「甘え」は子供が発するものであることが、ほぼ自明のこととされている。これに対して意義を唱えたのが、北山修（1997）である。北山はそのような場合の「甘え」は、必ずしも子供から一方的に向けられるものとはいえないと主張し、その理由として「甘え」を発音する際の特徴を挙げ、その体験的意味を考察した。そのうえで、外から観察して甘えられていると判断される側が、実は「甘えている」可能性もあると指摘し、しかしそれは見落とされやすいことを説明した。北山によれば、幼児の「甘え」がみられる場面において、幼児が発する感情とそれを受けとめる側の感情はそれぞれ「甘える」と「甘えさせる・

「甘やかす・愛する」などと表現される。このような場面では「甘え」は、幼児から一方的に発するものと捉えられ、それを受ける立場にある者の感情は「甘える」とは表現されない。「甘える」ではなく「甘えさせる」「甘やかす」または「愛する」と表現されるが、北山はこのうち「愛する」に焦点を当てて、「甘える」と「愛する」の語のもつ特性が、「甘える」のは幼児の側であるという見方を固定させていると主張する。「甘える」のは小さい者立場の下の者であり、甘えられるのはそれに対して大きい者立場の上の者であるとの思いこみが生まれるのは、「甘える」と「愛する」が持つ特性によると彼は説明する。

では「甘える」と「愛する」のもつ語の特性とは何か。まず「甘える」であるが、「甘える」と日本語で発音する時には、顔を下に向けては発音しにくい。アモマも通常口を開いて発音するため、顔をやや上に向けて発音される。その姿勢や口の形から、開いた口に、何か上から重要なものを与えられることを求める欲求を表現している、というのが北山の考えである。

これに対して「愛する」は、アクセントが第一音にあるため、発音する際に顔の向きがうなずくように上から下に移動する。また愛するの形容詞「愛しい」は、「痛はし」に由来することから、愛するという感情は、言い換えれば痛々しく見ていられない者へ抱く感情であるといえる。したがって「愛しい」という感情を持つ者は、立場的に相手より上にいる可能性が高い。このことは日本語の「愛する」が、それ自体既に上から下へ、大きい者から小さい者へという方向性を備えていることを示唆する。

以上のことから「甘える」者は立場の下の者であり、それを受ける「愛する」者は立場の上の者であることが考えられる。逆にみれば、日本語で考える場合、立場の下の者が発する感情は「甘える」と解釈されやすく、上の者が発する感情は「愛する」と解釈されやすいといえる。

次に北山は浮世絵を例に引いて、「甘える」と「愛する」が方向性を逆にする対照的な概念であることを説明している。その浮世絵では、幼児が母にすがりつき何かを求め、母はそれを見下ろしている。北山の解釈ではそれは幼児の「甘え」である。浮世絵の場面にその後があるとすれば、おそらく母がかがみ込み、幼児を抱き上げるだろうと予測される。それは母の子供の「甘え」の受容、言い換えれば母からの愛の表現である。この浮世絵のように、子供つまり立場の下の者が示す行動が「甘え」であり、立場の上の者が示す行動が「愛」なのである。英語ならば、どちらも LOVE で表せそうなものである。しかし日本語で考えた場合、このように子供が母にすがりつく様子を「子の母に対する愛の表現」とは言わず、また「母が子に甘える」とも言わない。

しかし北山は、子供のように小さく弱い者が受け身的に愛を求めているように見える時でも、実はそうではなく積極的に愛している場合があるのではない

か、と主張する。だがそのための言葉が日本語にない、あるいは少ないために、結局「甘えている」と解釈されるのだという。こう解釈されるために、甘えられる（と解釈される）側の「甘え」は考察の対象とならないのである。だが甘えられているとされる側が、実は「甘えている」場合もありうる。その理由は2つある。

ひとつは、「甘え」の心理的原型が、乳児の母子分離不安に求められることである（土居 1971）。乳児の認識世界は生後しばらくは母と一体であるが、成長するにしたがって母を自分とは別のものだと認識するようになる。つまり自己と対象が分化していくのである。それに伴い、愛情を自分に与えてくれていた母親が自分から離れていくことを不安に感じ、みずから母親を求めようとする。その感情が「甘え」の原型である。したがって甘えとは、自分に愛情をそそいでくれる対象を失うまいとする感情とも言い換えられる。先の浮世絵の例で再び考えてみると、そこには、幼児の母親に対する「愛」があるという視点が欠けている。だが仮に幼児の行動を「母への愛」とするならば、それを受ける側の母が幼児に対してもつ感情は、幼児の愛を失うまいとする感情である、つまり「甘え」だということができるのではないだろうか。

ふたつめの理由は、「甘え」が本来非言語的なものであることである。甘える本人は必ずしもそれを甘えとは意識せず、しばしば第三者によって認められることから分かる。甘える本人が「私は甘えていた」などと自分の甘えを言葉で語るときには、人は甘えの感情を内省的に見ているのであって、すでに甘えてはいないのである。夏目漱石の『明暗』から土居が引用した（1971）部分が、それをよく表している。その中では、ある夫婦が観劇に行くかどうかの話し合いをしている。妻は、劇を見に行きたいがために夫に「甘える」。だが自分の希望が叶わないことを知ると、あきらめたように夫に「今のはただ甘ったれたのよ。」と自分の言動を説明する。この妻は自分の「甘え」を説明しているが、その瞬間には妻はもう夫に甘えていないといえる。したがって「甘え」を言葉で表現したからといって、その本人が甘えているとは必ずしもいえないのである。同じように母と幼児の甘えで母が「この子はもう甘える」と言ったからといって、子が甘えている＝私は甘えられているという図式は成り立たないこともあり、母親の言動の裏に「甘え」の感情があると解釈することも可能なのである。

3-2 「甘え」の周辺の語彙

「甘え」とは「受身的に愛されるために相手の好意を求めること」であり、それは相互交流においてみられる事が分かった。ではそのような「甘え」の心

理はどう表現されるか。言い換えれば、甘えが実際に現れた状態は、どう表現されるか。以下に述べる語彙は、どれも甘えの心理に関係するものである。(土居 1971,1975,2001)

甘えられない心理を表すのが、「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」である。「すねる」は、素直に甘えられない結果起こるが、すねながら甘えているともいえる。「ひがむ」のは自分が不当な扱いを受けていると思う感情だが、それは自分の甘えのあてがはずれたことに起因している。「ひねくれる」のは甘えることをしないでかえって相手に背を向けることであるが、それは相手に対し他に何か含むところがあるからである。したがって甘えていないように見えて、根本的な心の態度はやはり甘えであるといえる。「うらむ」のは、甘えが拒絶されたということで相手に敵意を向けることである。

また、甘えさせてほしい心理とそれが容易に出来ない様を表すのが、「たのむ」「とりいる」「こだわる」「気兼ね」「わだかまり」「てれる」である。「たのむ」は、相手に甘えさせてくれるよう表現することである。「とりいる」は、たくみに相手の機嫌をとって自分の欲望を達成させることである。これは相手を甘えさせると見せかけて、実はこちらの甘えを実現することといえる。物事に「こだわる」人は、人間関係の中でたのんだりとりいったりすることが容易にできない人のことである。「気兼ね」は通常相手に遠慮する気持ちを表すが、それは相手がこちらの甘えをすんなりと受け入れてくれるかどうか分からない、という不安があるからである。「わだかまり」というのは、内心に相手に対するうらみを持っている場合である。「てれる」人もこだわる人と同じように、自分の甘えを素直に表現できないが、それは他人の前で甘えを出すことを恥ずかしく感ずるためである。

甘えたつもりになることは、「甘んずる」という。これは本当は甘えられる状態ではないが、甘えたつもりになることである。

次に、「すまない」である。日本人は詫びの時だけではなく、感謝の意を表す際にも「すまない」という。これはなぜか。それは、自分に何かをしてくれたことで相手に迷惑がかかったと思い、このままでは私の気持ちが済まないという気持ちを持つからである。ではなぜそのような気持ちを持つのか。それは、相手の被った迷惑を詫びないと、相手がそれを失礼なことだとしてはしないか、という恐れを抱くからである。自分に対する相手の好意を失いたくはないので、そしてその後も甘えさせてほしいと思うので、日本人は感謝の気持ちを表すときによく「すまない」を使うのである。

次に、「気にする」である。「気にする」対象は、甘えの実現を阻害すると考えられるものである。甘えは他者依存的であるから、いうなれば相手次第である。甘えられなくなると甘えの感情はすねやひがみに転化するので、甘える

側は甘えを阻むものに対して敏感になり不安を感じる。この不安が対象を伴ったとき、その対象を「気にする」と表現するのである。

最後に、「落ち着く」である。「落ち着く」は、自分の居場所に落ち着いて安心するという意味である。なぜ落ち着くのかといえば、当の個人が安心できる人間関係や環境に身を置いているからである。土居はそのような状況の原型を、母の懐に求めた。つまり、落ち着ける状況というのは、誰か身近の者に甘えることができる状況であるといえる。また「落ち着く」を人間の形容として使うと、「落ち着いた人」と表現される。このような人は実際に落ち着く場所を持っているというよりも、内的に落ち着くところを持っている、つまり精神内界に甘える対象を持っているので、どこにいても落ち着いた状態を維持できると考えられるのである。

3-3 「甘え」は日本だけのものか

「甘え」の語は日本語に特徴的なものであるが、では「甘え」は日本でしかみられない現象なのだろうか。

「甘え」は「乳児の母親との分離に対する不安」をその原型とし、非言語的なものである。これらのことは、甘えが日本に独特のものではなく、普遍的な感情であることを示唆する。土居はその著作の中で繰り返し、「甘え」の心理は決して日本人だけのものではないことを強調しているし、実際日本人が欧米諸国の人々を観察すれば、「甘え」で記述できるような現象を目にすることができるだろう。ではなぜ日本には、「甘え」とその周辺の語彙が言葉として存在するのだろうか。それは、甘えの感情がそれぞれの社会においてどのような地位を与えられているか、どのような役割を果たしているかということと関係がある。このことは、その社会におけるふさわしい成人像を検討することで明らかになる。

理想とされる成人の在り方は、それぞれの社会により異なる。よくいわれる理想的な成人像は、欧米では自律した主体的な個人であるのに対して、日本をはじめとするアジア諸国では、人間関係に調和することのできる個人である。それは、日本語で人を「人間」と表現することからもうかがえる。人間とは「人と人との間」のことであり、それはつまり、自己を人と人との間に見いだすということである。東洋における自己の感覚の理解には、シュー（1971）のサイコソシオグラムが役立つ。シューは人間の機能を一連の不規則な同心円で描いた。その同心円は、8つの層から成りそれぞれ社会的なコミュニケーションのレベルを表している。一番広い円が0層で、中心にある円が8層である。

0層は個々の違いのよく分からない、個人がおぼろげにとらえられるだけのあいまいな外界を示している。1層はより広い一般社会で、人はその中で行動するが、直接見分けることはできない。2層は個人に影響を及ぼす社会や文化であり、その中には知人や同僚などが含まれる。3層は最も個人と近接していて親密な社会で、家族や親しい友人などが含まれる。4層は移行地帯であり、ここでは個人とその社会的環境との接触が行われる。5層は、表現されないあるいは表現不能な意識である。6層と7層はフロイトのいう前意識と無意識に相当する。シューによれば、欧米の「パーソナリティ」概念がこの図の4・5・6・7層を指すのに対して、中国語の「人(レン)」の概念は2層の一部、3層、4層、そして5層の一部を合わせたものであるという。自己をどうとらえるかの欧米と中国の視点の違いは、このように説明できる。そして浜口(1987)によれば、日本語で表現される「人間」が意味するものは、円の大きさが中国のそれと異なりはするものの、どこまでを「自己」に組み入れるかは中国の「人」と同様である。「人」や「人間」として捉えられる自己と、「個人のパーソナリティ」として捉えられる自己とでは、その内容が違うことがこの図から明らかになる。

欧米における「自己」を「個人」、日本や中国における「自己」を「人」とすると、欧米における「個人」は自律的な主体という意味が前面に出るのに対して、日本や中国においては、「人」は個人それのみで切り離されるものではなく常に周囲との関わりの中にある、という意味が前面に出る。前面に出ると表現したのは、欧米の「個人」であれアジアの「人」であれどちらも自律的な部分と周囲との関わりの部分が含まれているのだが、強く焦点が当てられている部分がそれぞれ異なるからである。

このように異なった「自己」の意識を持つ社会の中では、そこで理想とされる個人の在り方もやはり異なる。それを浜口(1987)は、欧米の「個人主義」と日本の「間人主義」という語を用いてそれぞれを対比させて論じている。欧

米の「個人主義」は、自己中心主義・自己依拠主義・対人関係の手段視の3つの特徴から成る。それに対応して日本における「間人主義」は、相互依存主義・相互信頼主義・対人関係の本質視から成る。欧米の「個人主義」に基づく人間観は、主体的で自律的な人間である。そこでは、生活する上で物事を決定するのは他でもない自分であり（自己中心主義）、窮地に陥ったときに自分を救えるものは自分の決断に他ならず（自己依拠主義）、自分の目的に沿った対人関係は自ら開拓していく（対人関係の手段視）のである。それに対して「間人主義」に基づく人間観は、周囲と調和しそれに適応できる人間である。そこでは、意志決定においては周囲の状況を考慮することが必要とされ（相互依存主義）、困難な状況にあるときには人は周囲の援助を期待することができ（相互信頼主義）、人間関係はそれが自分にどんな利益をもたらすかとは関係なくそれだけで意味のあるもの（対人関係の本質視）なのである。

以上それぞれの社会における、個人の理想的な在り方の概観を述べた。ここで「甘え」は日本だけのものかという問いに再び帰ると、欧米の「個人主義」では、「甘え」は受けいれがたい概念であることに気づかれる。「甘え」とは相手の好意をあてにする、またはそれを期待する心理である。したがって結果を相手にゆだねることと同じである。これは表向きには主体的な行動が重視される社会では、良しとされない感情である。だからといって「甘え」の感情は欧米には存在しないのかというと、そうではない。では、そこで「甘え」感情はどうなるかということ、抑圧されて人々の意識にのぼらなくなるのだ。

では「甘え」感情はどのように抑圧されてしまうのか、ジョンソン（1997）はその過程を社会化に見いだした。彼は日本の子供の社会化を論じ、米国の一般的な社会化と比較している。社会化の過程を通じて、日本の子供は必要に応じて「甘えること」を学び、また欧米の子供達は「甘えることはいけないということ」を学ぶのだ、と彼は述べている。

日本の社会化の特徴を述べる上でジョンソンはまず、日本の家庭における乳幼児と母親の親密さを挙げている。日本では核家族化や都市化がすすみ、多忙による父親の不在などが原因で、母親と乳児はあまり広くない家の中で孤立することを余儀なくされる。したがって母親と乳児は常に近い場所におり、泣いてむずがる時にはそのまま長時間放置されることはなく、抱き上げられたりあやされたりする。一方欧米では、子供が一人別の部屋にあるベビーベッドに寝かされそのままにされることも多く、乳児が泣いたからといって、すぐさま母親がかけつけてくるとは限らない。これらの体験は日本の乳児にとっては、「泣けば誰かが来て自分を快適にしてくれる」という「甘え」を学ぶことに他ならない。しかし欧米の乳児にとっては、「泣いてもどうにもならない」ということを体験から学ぶことになる。

また日本では、子供が幼い時期に両親と共に寝たり入浴したりすることは一般的なことであるが、欧米においてはふつう子供は両親とは別の子供部屋でひとりで寝かされ、両親と共に入浴する期間も日本のそれと比べて短い。これは、子供の自立心を早い時期から育てようとする欧米の考え方の表れといえる。

幼児に対するしつけに関しても、日本と欧米では違いがみられる。日本の母親は、公共の場に限らず子供の泣き声に対して敏感である。子供が泣きやまないと、食事を与えたり、だっこしたり、あやしたり、おむつを変えたり様々な手段を講じる。また子供が成長し言葉を解するようになると、人前で泣いたり騒いだりすることを禁じようとするが、それでも泣きやまない場合は、何か気晴らしになるようなものを与えたり、地下鉄やバスから降りて他の人の迷惑にならないように対処する。これに対して欧米では、子供が泣き出すとやはり子供をあやす行為をとるが、いつまでも泣きやまない時には泣きただけ泣かせておく。日本ではこのような行為は母親の責任放棄ととられるので、泣かせたままにしておくことは少ない。既に述べた乳児の場合と同様に、これらの体験を通じて日本の子供は、「泣くのは良くないことだが、泣いても母親がなんとかしてくれるのだ」という「甘え」を学び、欧米の子供は「泣いてもどうにもならないことがある」のを学ぶのである。

ひどいいたずらのような、周囲が容認しがたい行為を幼児がとったとき、母親はどのように対処するか。日本では、言葉で直接注意することもあるが、故意に無視したり、間接的に脅したりして、それら非言語的な振る舞いから、幼児にいたずらの悪さを分からせようとするところがある。幼児はその状況をどうしてよいのか分からないので、その事態の非言語的な特徴をもとに想像をめぐらせ、母親の気持ちを推測しようとする。結果的にこのようなやり方は、幼児に「共感」の習得を促し、それは、非言語的な「甘え」の感情のやりとりが日常的な、日本社会への適応に役立つのである。

他方欧米では、子供のいたずらへの母親の反応はいわば説教に近い。つまり、「なぜそれはよくないか」を説明しながら怒るのである。子供はそれに反発を感ずることもあるが、母親ほど筋道の立った反論はできないので、自分を弁護しようとしても親の論理にやりこめられてしまう。その結果子供は、親にやりこめられずに自分の意志を通すやり方を模索し始めるのである。したがって欧米で親が子を叱る様子を見ていると、子供が成長するほどそれはしばしば親子間の議論に発展することに気づかれる。日本ではそのような行動は「口答えをする」という言い方にも表れているように、良くないこととみなされることが多いが、欧米では必ずしもそうではない。そしてこのような親子間のやりとりを通して、欧米の子供は、自分の意見を述べるためにはみずからそれを筋道立てて説明せねばならない、ということを経験するのである。そこには「言わなくて

も私の言いたいことは分かるはず」という、「甘え」はみられない。

しつけの際に引き合いに出される「罰」はどうか。日本では、「そんなことをすればみんなに笑われますよ」とか、「そんなことしてお母さん恥ずかしいわ」など、子供の行動の結果に対人関係的な意味をもたせようとする。そうすることで、子供は自分がしたことによって自分が罰を受けるだけでなく、家族全体に恥をかかせることになりかねないと感じるようになる。自分の身近な人々の評価にも責任をもたねばならない、というこの考えは、儒教的な考えがその基底にあり、日本において道德観念の重要な部分を構成する。

一神教の宗教を持つ欧米においては、道德は宗教に基づいている。したがって、道德に反する行為に対する罰は、直接的には両親から受けるのであるが、それはさらに大きな存在、強い力すなわち「神」がその背後にあることを、子供は徐々に理解していく。したがって成長して自分が何か道德に反する行為をしたときは、神に対して罪悪感を感じる。これら罪と罰に対する思想が、浜口が対比させて述べた日本の「相互依存主義」と、欧米の「自己中心主義」の中核にある。ここでいう「相互依存」とは、自分は自分だけで存在しているのではなく、何か自分が悪いことをすれば自分だけでなく周囲の人間の面目もつぶすことになる、ということの意味する。したがって自分は常に周りに迷惑をかけぬよう注意をはらうべきであるし、裏を返せば、周囲の人間も私に対してそうすべきなのである。この周囲への期待が「甘え」である。それに対し自己中心主義の「自己中心」とは、本質的には自分と神の関係が中心である、という意味である。ある個人が何か道德に反する行為をした場合、それは彼自身の意志で行ったことであるので彼は神に対して罪を詫びなければならないが、神に罰されるべきは彼だけである。また同様の理由から、罪を侵した他人の行動の責任を彼が負ういわれはないのである。

これまで述べてきたことをまとめると、次のようになる。「甘え」はもともと、他者の好意をあてにする依存的な感情を指す。それ事態は普遍的な感情であるように思われるのに、なぜ日本には「甘え」とそれに類する語があるのか。それは、「甘え」で表現される感情を日本人は許容できるからであり、また「甘え」の現象に敏感であるからだといえる。敏感であるからこそ、それを「甘え」という語で表現し互いに共有することが可能なのである。それではなぜ「甘え」の感情を日本人は許容でき、欧米人にはそれができないのか。

あるべき成人の姿は、それぞれの社会により異なる。それはしばしば、宗教に基づく道德観の違いに依っている。一神教が主な宗教である欧米では、「自己中心主義」「自己依拠主義」「対人関係の手段視」という言葉で特徴づけられるような社会に適應できる、自律的な個人が求められる。それは実際の状況においては、自分の意志をはっきりと主張する、（少なくとも表面的には）自

分以外の者に依存することなく、主体的に判断し行動する、という形態で表れる。欧米における社会化は、そのような行動をとれる個人を育成するために行われるのである。そこでは「相手の好意をあてにする」という「甘え」感情を持つことは、相手に依存する感情をみずから認めるということになり、受けいれられないのである。そのような感情を持つことのないように社会化は行われるのであるから、社会化の過程で「甘え」の感情は意識の外に追いやられてしまう、つまり抑圧されてしまうと考えることができる。

一方日本では、「相互依存主義」「相互信頼主義」「対人関係の本質視」という言葉で特徴づけられるような社会に適応できる、身近な対人関係を自己に組み入れることのできる個人が求められる。それは実際の状況においては、言葉で表現されなくても相手を共感的に理解できる、周囲の人間に対しても責任を負う、などの形態で表れる。日本における社会化は、そのような行動をとれる個人を育成するために行われるのである。そこでは「相手の好意をあてにする」という「甘え」は、許容できる感情である。なぜなら、周囲の身近な人間も「自分とつながりのある」いわば自己の一部であるので、相手に期待した相手から期待されることは、相手への「依存」ではなく、自分と相手のつながりを保つために不可欠なものなのだからである。つまり「甘え」感情により相手とつながることで、自己を認識するのである。したがって「甘え」感情は、日本においてはお互いに共有する必要のある概念なのであり、だからこそ日本語には「甘え」とその周辺の語が存在するのだといえる。

以上のことから、「甘え」の語は日本語に特徴的であるが、その心理は普遍的なものであることが明らかになった。実際、「甘え」との共通性が論じられる心理学理論も存在する。それらの理論を次章で紹介し、「甘え」との共通点を指摘する。

5) 「甘え」理論と他の理論

5-1 「甘え」理論とマイケル・バリントの理論

マイケル・バリントは、ハンガリー生まれの精神分析学者である。フロイトの弟子であった、フェレンツィの教えを受け継いでいる。フロイトの精神分析においては、分析者は終始患者を解釈するにとどめ患者に積極的に関わるべきではない、とくに患者の転移感情や退行状態に対しそこから生じる要求などには、慎重に対応せねばならないとされている。しかしフェレンツィは必ずしもそのような立場をとらず、時に患者に積極的に関わった方が治療効果をあげる

と主張し、フロイトと対立した。バリントはこのフェレンツィの教えにならい、理論としては不十分だったフェレンツィの説を理論化することを試みた人である。

バリントはその臨床活動の中で、分析がある程度の深さまですすむと、患者たちがある種の原始的な願望充足を期待ししばしば要求さえするということに気づき、それを「基底欠損 (basic fault)」と名付けた。その名の通り、何か重要なものが欠けていると患者が感ずる状態であるという。彼によれば、基底欠損は二つの特徴をもつ (1937)。ひとつは、それらの要求を満たすことのできるのは、周囲の者、外的世界だけだということである。もうひとつは、その要求が適切に達成されたときには、その満足の経験は非常にひっそりと起こるためほとんど目にとまらないということである。

ではこの「基底欠損」状態はなぜ生まれるかという、それは「一次愛の挫折」が原因だという。「一次愛」とは生後まもなく、まだ乳児が自分と周囲との境界をはっきりとは感じていないころに示す対象への働きかけのことである。その対象のことをバリントは「一次対象」と呼ぶが、ふつうは乳児の最も近くにいる母親である。「一次愛」の表現とは、言い換えれば対象へのリビドー備給つまり愛情表現に他ならないが、その目的は一次対象がその愛情に応えることによって乳児が満足を得ることである。したがってその愛情表現は能動的であるが、それを通して受け身の愛情を求めるものであるといえる。「基底欠損」状態にある患者を治療するには、分析過程において患者に「一次愛」を再体験させ、分析者はそれを受けとめる、一次対象としての役割を果たさねばならないのである。

バリントのいうこの「基底欠損」の状態、これはつまり「屈折した甘え」を表現する状態と同じである。それは周囲によってしか満たされ得ず、またその願望はしばしば要求がましい点が、「屈折した甘え」と同様であることを示す。また「一次愛」とは、能動的に受け身の愛情を求める行動であることから、「乳児が示す純粋な甘え = 健康な甘え」のことである。そしてそれが適切に満たされないと、「基底欠損」状態を生むのである。

したがってバリントのいう「一次愛」と「一次対象」、「基底欠損」とは、それぞれ土居のいう「健康な甘え」、「母親もしくはごく身近にいる甘えの対象」、「屈折した甘え感情しかもてない状態」と同じであることが分かる。バリント自身も土居との書簡のやりとりの中で、一次愛が「甘えの歪められない形態」であることを認めており、著作 (1967) においてもそのことに言及している。ではなぜバリントの体験したような患者の言動が、いわゆる「甘え」であることの理解に辿り着くまでに、フェレンツィとバリントの長い研究期間が必要だったのだろうか。それはバリントによれば、「ヨーロッパの言語はいず

れも、能動的愛と受け身的愛を区別できない点で貧弱である」からだという。

5-2 「甘え」理論とアブラハム・マズローの理論

アブラハム・マズローはアメリカの心理学者で、実存主義とよばれる第三勢力に属する。マズローは人間の欲求を段階的に分類し、それを「基本的欲求」と名付けた。基本的欲求は1) 生理的欲求、2) 安全の欲求、3) 所属・愛情の欲求、4) 承認の欲求、5) 自己実現の欲求、の5つからなる。1) が最も低次の欲求であり、数が大きくなるにつれて高次の欲求になる。人は低次の欲求が満たされると、順により高次の欲求が現れてくる。

これらの基本的欲求を辻村と又吉(1996)は、「甘え」の感情の原動力であると解釈した。彼らによれば「甘える」とは、「本来なら自分でやってできないことではないことを、あえて他人の手を煩わそうとすること」である。子供が甘える時は、成長過程で現れるこれら基本的欲求に基づいた甘えを示す。たとえば「安全の欲求」から生じる甘えには、お母さん一緒に寝てちょうだい、一緒に公園に行こう、等があるが、そこで甘えさせておくと、そのうち恥ずかしいからひとりで寝るとか、ひとりで行く、と言い出すようになる。このように下位の欲求に基づく「甘え」を充足させると、順次に高位の基本的欲求に基づく「甘え」に変化していくのである。そこで彼らは「甘えさせる」を、「基本的欲求に基づく甘えを充足させること」と定義した。

では基本的欲求が充足されないと、つまり甘えさせなければどうなるのだろうか。マズローの指摘通り解釈すれば、その段階にいつまでも留まってしまう、つまり精神的に成長しなくなってしまうのである。例えば安全の欲求が満たされないと、子供ならばひとりで留守番をすることができなくなる、大人ならば常に誰かと行動を共にしなければ落ち着かない、といった行動を示すようになる。低次の基本的欲求が満たされないまましていると、自然に高次の欲求に移行することができない。このような時に「甘えたい」という気持ちになっても、それが年齢にふさわしくない甘え、つまり年齢にふさわしい基本的欲求に基づく甘えでない場合には、その甘えは受け入れられず、結果「甘えたくても甘えられない」状態に陥る。

「甘えたくても甘えられない」という状態の時、子供は他の子供の行動を真似てみようとする。すなわち「誰々は・・・してもらったから、私も・・・したい」という具合にである。自分の甘え方では甘えられないと分かった子供は、このようにいろいろと甘え方を工夫するようになる。真似をした他の子供の行動が年齢相応のものであれば、親はそれを受容する。すると子供は、本来の欲求に基づいて甘えても受け入れられないので、その後は他人から学習した「甘え方」

に基づいて甘えるようになる。「他人から学習した甘え方」とは、自分の内部から自然にわきあがる欲求に基づくものではないので、土居のいう「屈折した甘え」にあたる应该说よいだろう。

辻村と又吉はこのように、マズローの理論と「甘え」の共通性を指摘した。この指摘の通り、「甘え」が基本的欲求に基づく行動の背景にあるとすれば、「甘え」の心理は日本に特有のものではなく、人間に普遍的なものであるといえる。また彼らの提言は、欲求・行動・感情の3つのレベルから成る「甘え」の、欲求部分がどのように構成されているか、という疑問に対するひとつの答えであるともいえる。

4) 「甘え」の現象

4-1 「甘え」の経験の分析

「甘え」は「受身的に愛されるために、相手の好意を求める心理」を背景に持つが、では、「甘え」は実際にはどのように経験されるのだろうか。

土居(1971)は「甘え」として経験される現象を、「甘えの語彙」「甘えの論理」「甘えの病理」「甘えと現代社会」に区別して述べている。これらを一読するだけでは、「甘え」の現象とは何なのか、その輪郭がつかみにくい。そして「甘え」で語られる現象が幅広いために、あたかも日本人の社会慣習や特性や思考のパターンが、全て「甘え」で説明されるような印象を受ける。その漠然とした輪郭が、その後の批判の対象となった。これに対しジョンソン(1997)は、甘えの経験を分析し4つのレベルで説明することで、「甘え」の輪郭をより明確にしようとした。

その第一のレベルは、精神内界の傾向として概念化される「甘え」である。すなわち、「欲動」「特性」「動機」「欲望」としての「甘え」である。このレベルでは、「甘え」は特定の愛着や結合を求める、生まれながらに持つひとつの欲動であり、土居によればその典型は乳幼児と母親の結びつきである。この動機は独立した基本的な欲動であるが、実際には他の欲動と結合して作用する。

第二のレベルの「甘え」は、対人関係的なものである。一方の人が満足を求め、他方が人が満足を与える、という非対称的な相互作用である。それぞれの行動は、「甘える」と「甘やかす・甘えさせる」にあたる。そこでは、非対称的な相互依存という特徴が際立つ。二者間や小集団に限らず、社会間、世代間といったより大きな集団相互の間にも生じる。またそれらの「甘え」は、現象的な側面よりも、イデオロギーのように心情的側面が前面に出る場合もある。

例えば、戦後まで多くの日本人が、天皇に対して抱いていた思想がそうである（土居 1971）。

第三のレベルの「甘え」は、期待されることを互いに理解し、規則に従い、一定の予測される目標を達成するという、その文化において承認されたやりとりとして経験されるものである。例えば謙遜の表現がそうである。自分に属することがらが誉められた際に、「まだまだです」「とんでもない」などと謙遜する場面は、日本では一般的にみられる。だがこれは、自分は表面的にはその賞賛の言葉を否定しているけれども、それはあなたの誉め言葉を喜んで受け取った印ですよ、という感謝の念のひとつの表現であり、それをあえて口にしなくても相手が理解することを「期待する」感情が、その背景にある。したがってその感情は「甘え」であるといえる。

第四のレベルの「甘え」は、言語学的特徴によって検討することのできるものである。これは「甘えの周辺の語彙」の章で紹介されたような語彙に代表されるが、その意味論的な特性だけでなく、社会言語学的な現れ方も含む。日本語でいえば、敬語の使用などがそうである。敬語は目上の者と目下の者との関係性を明確にする働きを持つので、少なくとも表面的には依存的な関係を構築する。したがって、そこでは「甘え」の感情が表出されやすくなるのだ。

「甘え」の経験は、以上のように4つのレベルで論じることができる。しかし現実の経験とその意義の考察においては、これらのカテゴリーは互いに重なり合うことがある。

4-2 「甘え」と精神病理

土居（1971）は「甘え」を、「甘えの語彙」「甘えの論理」「甘えの病理」「甘えと現代社会」に分類して論じた。「甘え」はこのように様々な観点から論じることが可能であり、それは「甘え」の感情が人間の思考、感情の状態に広く影響を及ぼすことを示す。

このように「甘え」をひろく取り扱おうと、ここでは論じきれない。よって、「日本人はどのように甘えを体験するか」を検証するうえで、私は心理療法の場を選んだので、それと深く関連すると思われる「甘えの病理」をこの章でとりあげる。しかし前章でも述べたように「甘え」の経験はいくつか異なるレベルで考察することができ、土居の分類はそれぞれ複数のレベルで論じることができる。したがって、言い換えれば土居の分類はそれぞれ個別に独立したのではなく、互いに影響しあっているのである。「甘えの病理」が問題になる背景には、「甘えと現代社会」において述べられていること、つまり「甘えが現代社会においてどのような価値を与えられているか」や、また「甘えの論理」

で述べられていること、つまり「甘えの現象が有する論理構造」が、存在するのである。「甘えの病理」という分類は、それら複数の側面を背景に持つ「甘え」がどのように病を引き起こすのかに注目した結果、生じたひとつの分類なのである。

4-2-1 「甘え」とアンビバレンス

アンビバレンスとは、日本語にすると「両価性」と訳される。これは、相反する感情が同居する状態を指す言葉である。このことを表す言い回しとして、日本語には「可愛さ余って憎さ百倍」等がある。人は誰でもこの感情を持ちうるが、それが度を超すと神経症などの精神障害を引き起こす。ではなぜこのような状態に陥るのか。土居は「甘え」がその根底にあると述べ、「甘え」の心理でアンビバレンスを説明している。

「甘え」とは相手の好意を求める心理であるので、いつもそれが受け入れられるとは限らない。その実現は相手次第である。そして「甘え」はもともと非言語的な性質を持つので、ある欲求を伴った感情が「甘え」であると、本人はふつう意識しない。そのような時に「甘え」が適切に処理されないと、その感情は「うらむ」「すねる」「ひねくれる」など二次的な感情を生む。そしてこれらの感情は、アンビバレンスな性質をもつ。つまり、「甘え」の感情にはアンビバレンスを伴う危険が常についてまわるということである。ではそのアンビバレンスはどのようなものかという、と、「うらむ」という状態を例に挙げれば、次のように説明できる。

「恨む」は甘えが拒絶された結果相手に敵意がむけられた状態であるが、もともとの「甘え」がそれで解消されたわけではない。「甘えたくても甘えられない」という感情が「恨む」という姿をとっただけであり、相手への「甘えたい」感情は依然としてそこにある。また「甘え」は究極的には、相手とつながろうとする志向のことである(土居 2001)が、しかし「恨む」の状態のときは、この「甘えたい=相手とつながりたい」感情と、「相手に敵意をむける=相手と距離をおこうとする」感情が混在しているのである。したがって「恨む」は、相反するふたつの感情を有する、アンビバレントな状態を表しているといえるのである。

「恨む」と同様「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」等も、アンビバレントな状態を表している。では、なぜこのようなアンビバレンスを表現する言葉が存在するのか。「甘え」という語が存在しそれが人々の意識にのぼる日本において、これら甘えから派生する語の存在は自然なことのように思われる。しかし土居はこのことを、なにより、日本人はアンビバレンスな感情に対して抵抗

がなく、これを受け入れているからだ、と説明している。

ではなぜ、アンビバレンスな感情に対して抵抗が少ないのか。それは日本人がしばしば「甘え」に付随するアンビバレントな状況にさらされるためである、と土居は述べ、それらのアンビバレンスを「表」と「裏」そして「内」と「外」という対概念を用いて説明した。この対概念で説明できる例として「建前」と「本音」がある。「建前」と「本音」は、日本人のコミュニケーションを記述する際によく用いられるが、これは対外的に示す自分の意志（＝表）と、内に秘めた自分の本当の意志（＝裏）の間に違いがある時、本当の意志を意識しつつ対外的には異なる意見を表明する状態を表している。表を表現するのはその個人にとってある一定以上の心理的な距離を有する環境（＝外）においてであり、裏を表現するのはより心理的に近い環境（＝内）においてである。このように、異なる意志を意識しつつ使い分けるといったコミュニケーションは、それ自体アンビバレントなものである。

では、「建前」と「本音」はコミュニケーションにおいてどのような役割を果たすのか。これらの言葉は普通、なにか好ましくない意見や感情を本音として持ち、それを建前で隠すという、人を欺くような悪い印象で語られることが多い。しかし「建前」とは、土居によればおそらく本来は建築用語の建前と同じであり、それがなければ家を建てることができないというほど、重要だということである。つまり、建前は単に本音を隠すためのものではなく、それ以上の意味をもつと考えられるのである。ではどのような点において建前は重要なのか。それは、社会のルールに則った生活を行う上で必要な役割を果たす、という点においてである。言い換えれば、社会生活を円滑にすすめるために必要なのである。

日本人のコミュニケーションにみられるこれら「建前」と「本音」は、しばしば外国人からの批判の対象となるが、しかし建前と本音は日本人だけが持つものではない。直塚（1980）によれば、建前と本音を批判する外国人にとっては、「建前（対人的に表明される自分の意志）と本音（実際に自分が考えていること）は同じである」のが建前なのである。実際にはその裏に本音が隠れている。このことは、土居（1985）もいくつか例を挙げて指摘している。

したがって、「建前と本音」に代表されるようなコミュニケーション上のアンビバレンスは、いわば避けがたいものであるといえる。こういったアンビバレンスの状態を表す語があるということは、日本人にとって、コミュニケーションをとる際に生じるアンビバレンスは自明のもの、という意識があることを意味する。「甘え」はアンビバレントな感情を生むが、「甘え」が日本人にとり自然で受け入れることの出来る感情であるので、それに伴うアンビバレンスも、日本人にとっては自然なこととして受け入れられるのである。

しかし時に、このアンビバレンスを受け入れることが出来ないとき、またアンビバレントな感情に忠実であろうとすると、それは精神疾患となって現れる。コミュニケーション上の一例を挙げれば、「建前」と「本音」を使い分けられなくなった時、またはそれを受容出来なくなった時である。なぜアンビバレンスを受け入れることが出来ないのだろうか。それについて土居は、甘えの感情が最も頻りに経験される家族内において、適切なかたちでアンビバレンスを経験しないまま、大人になってしまったことが原因だとしている。アンビバレンスは甘えに端を発するので、言い換えれば甘えが適切に体験されなかったということである。では、適切な甘えの体験とはなんだろうか。

適切な甘えの体験とは、自分の内部から自然とわき上がってくる甘え感情、つまり「健康な甘え」の感情を、その相手にきちんと受けとめてもらえる体験のことである。これは、その「甘え」に基づく願望が満たされることを、必ずしも意味しない。「甘え」が理不尽な理由でしりぞけられたり、無視されたりせず、願望が満たされなくてもその感情がきちんと受けとめられたと感ぜられるか、がより重要なのである。そしてこのように適切に「甘え」が受け入れられれば、子供は自然とそこに内包するアンビバレンスも体験することになり、大人になってから、それらのアンビバレントな感情に振りまわされることがなくなるのである。

これをふまえて土居（1996）は、家族はアンビバレンスを経験する場として重要であると述べている。シュアのサイコソシオグラムで、家族は自己をとりまく最も近い円を構成しているように、個人にとって家族は最も心理的に近い場であり、言い換えれば「甘え」が最もよく体験される場と言ってよい。家族とのコミュニケーションの円つまり3層を個人にとっての「内」とすると、その外側2層は、いわばすでに「外」になる。つまり2層で「甘え」が現れる時には、ある社会的なルールに則った形態に変化しているのであって、家族内で現れるそれとはいくらか形が変わっており、またそうするよう親も子供に対して教える。したがって純粋なかたちで「甘え」のやりとりが行われるのは、3層においてである。またそれに伴うアンビバレンスを最もよく経験するのも、3層つまり家族を中心とした、個人にとっての「内」においてなのである。成長過程において家族のようなごく近しい人々の間で、適切な「甘え」とそれに伴うアンビバレンスを体験することは、大人になってからそれらを受け入れられるようになるために必要なことなのである。

4-2-2 「甘え」とナルシシズム

ナルシシズムを日本語に訳すと「自己愛的」となるが、今はナルシシズムと

いう語そのままを使うことが多い。ここでは「甘え」とナルシズムとの関係を述べる。

適度な「自己への愛」は誰にとっても必要であるが、それが行き過ぎるとやはり自己愛的人格障害などの精神障害が引き起こされる。フロイトによればナルシズムとは自己へのリビドー備給であり、一次ナルシズムと二次ナルシズムがある。一次ナルシズムとは、まだ自己と対象が分化していない状態の、乳児のもついわば全能感のようなもので、それは自己と対象が分化していない故にリビドーの全量が自我内に貯蔵されるため、起こる。その後自己と対象の分化が起こり、分化に伴い対象にリビドーが振り向けられるようになる。リビドーを向けるとはつまり愛することであるが、土居（1962）によればこのリビドー備給は乳児の初期の「甘え」とほぼ同じである。しかしこの「甘え」は、母親またはそれに代わる乳児の世話役の不備等によって、満たされないことがしばしばある。そこで乳児は次にその対象への愛を、自己へと再び向けるようになる。土居の言葉を借りれば、「世界が自分を十分愛してくれないなら、自分で自分を愛して、自分に満足を与えるしかない」のである。こうして再び自己へ向けられた愛情が、二次ナルシズムである。

一般に「ナルシズム」といわれるものは、二次ナルシズムのことである。一次ナルシズムについては、バリント（1978）のようにその存在を認めない説もあるので、ここでは二次ナルシズムを「ナルシズム」として扱うことにする。

では「甘え」と「ナルシズム」は、どのような関係にあるか。過度のナルシズムにより引き起こされる障害は、自己愛的人格障害がその代表であるが、土居（2001）は、この自己愛的人格障害は満たされない甘えが原因であるとしている。自己愛的人格障害の患者はどのような行動をとるかということ、はた目にはそれは自己中心的な、しばしば要求がましい行動に映る。しかしそれらの要求は、患者にとっての本来の目的でないことが次第に分かる。なぜならある要求が通っても本人は満たされることなく、次々と別の要求をするからである。このように要求がましい態度のみに目を向ければ、それは「自己中心」にすすめようとしているとの解釈はできるが、「自己を愛そうとしている」態度とは解釈しにくい。ではなぜこのような患者を「自己愛的人格障害」というか。それは、自分の要求を通そうとすることで自己への他人の愛情を乞うている、と解釈できるからである。他人の愛情を求めるということは、つまり「甘え」である。

ふつう「甘え」は非言語的な感情であるが、自己愛的人格障害の患者はこれを自覚している。患者にとっては、「甘えたい」欲求として自覚されるのである。しかし実際には甘えたいのに甘えられないので、「甘えたい」欲求が強く

自覚されるのだと思われる。そうであるからこそ、患者は甘え続けるのである。患者はしたがって常に一種の欠乏感を感じている。

ここで、先に述べた「健康な甘え」と「屈折した甘え」とナルシシズムの関係を述べる。ナルシスティックな人間の「甘え」は、このうち「屈折した甘え」の方である。既に述べたように「健康な甘え」と「屈折した甘え」の違いは、その甘えに対するたしかな受け手があるかどうかであるが、これは言い換えれば、相手に自分の甘えを受け入れるだけの余裕があるかどうかにかかっている。そしてそのためには、あらかじめ相互の信頼関係が築かれていることが必要である。信頼関係が築かれていない状態のときに、または相手にその甘えを受け入れる余裕のない状態のときに、それを判断できずに甘えようとするのが自己愛的な人間である。しかしそのような「甘え」が受け入れられるはずがなく、「甘え」は結局満たされないままであるので、結果「甘えたい」という欲求がさらに募る。そこで、甘えが受け入れられるように色々と方法を変えて甘えてはみるものの、それはもう自分の中から自然にわきあがる「甘え」の感情ではない。つまり「屈折した甘え」である。したがって向けられた側にとっては、ただの要求がましいふるまいとしか映らないのである。こうして「甘えたいのに甘えられない」という悪循環に陥る。

以上述べたように、ナルシシズムとは「自己への愛」のことであるが、それは「自分で自分を愛する」というよりも、「人に自分を愛してもらおうとする」傾向であるといえる。したがってそのためにとられる行動は、「自分への相手の好意を求める」行動であると説明できる。故にそれは「甘え」であるといえるが、過度のいわゆるナルシスティックな「甘え」は「屈折した甘え」を生み、自己愛的人格障害と呼ばれるような障害を引き起こすこともある。

4-2-3 日本語と精神病理と「甘え」

近代になって、精神医学の発達に伴い精神の病の分類が行われてきたが、精神が病んでいる状態を表す名称はそれ以前にもあった。すなわち「気のやまい」「気ちがい」（土居 1971,1994）といった名称である。これらはそれぞれ今の「神経症」と「精神病」のことである。この他にも、「気」という語を用いて様々な精神の状態を記述することができる。例えば「気にする」「気がすまない」「気がきく」「気がせく」等である。私をはじめ問題にした、「気をつかう」もそうである。この「気」とはいったい何であろうか。土居（1971）をはじめ、「気」を「精神の動きの統一的な自覚」と説明したが、その後（1994）「こころがからだを通して外界に働きかける仕方のこと」と説明し直している。いわば精神のある一時における状態だけでなく、その「流れ」「機能」「影響」

をも含む、ということである。「気をたしかに持つ」という表現からも分かるように、「気」がこういう状態である、ということ自身で把握できるのは、自分の精神活動を客観視できている証なのである。つまり「気のやまい」にかかっている患者は、自分の精神状態を記述することはできてもそのコントロールができなくなった状態にあり、「気ちがい」の者はその「気」が自分たちの気と違ってしまっている、つまり自分たちには理解不能な状態にあるということである。現在神経症と精神病とよばれるこれらの精神状態は、日本ではこのように「気」という言葉と共に理解されてきたのである。

ところでこれ以外にも、「気」を用いた精神の病的な状態を記述する語は存在する。「気がすまない」はそれ自体は病的な状態ではないが、何度も手を洗わなければ「気がすまない」というように、度をこすと強迫行動や恐怖症、対人恐怖症などの神経症につながる。「気がせく」「気にする」等も同様である。「気がふれる」は気が振れているつまり「気」がずれている、正常な状態にはないということを表す語で、精神病様の状態を指す。これらの語の存在は、神経症や精神病が決してなにか特別なものではなく、普段体験する精神状態の延長上にあることを示している。

また「気」の観点からだけでなく、「甘え」で神経症、精神病の発生を説明することも可能である。

「甘えの周辺の語彙」の章で説明された語が表す状態、たとえば「こだわる」「わだかまる」等は、それぞれ度をすぎると神経症状となって現れ、さらに自分の置かれている状況に対する現実検討能力が失われると、ボーダーライン状態や精神病態を呈する。

また、「くやむ」という感情はメランコリー状態に通じる。この「くやむ」も「甘え」感情をその背景に持っているが、それは次のように説明できる。「くやむ」は、葬式の際に「おくやみ申し上げます」などと使われる。これは肉親を亡くした者に対する同情の気持ちを表す。ではなぜそれが同情を表すかという、死者の家族は死者に対して何かやりのこしたことを、しておくべきことがあったのに、それが今となっては叶わず、ただくやむしかないという状態にいるからである。ところでこの場合の「くやむ」は、やりのこしたことに対する自分の罪悪感だけで成り立っているのではない。それは自責のように見えて、しかし自分がそれについて罪悪感を持たねばならぬことに釈然とせず、このような思いを自分にさせる死者を恨んでいる。死者を恨んでいるのでなければ、運命を恨んでいる。罪悪感を感じないでいたいがために、自分以外のものへ責任転嫁をしようとしているので、それは一種の甘えであるといえる。

文法面から考察すると、日本語には独特の受け身の用法がある。それは、「子供に石を投げられた」のようにそれだけで何か被害を受けたという感情を伝え

られる用法と、「母にセーターを編んでもらった」のように「テモラウ」で表現する、何か好意を受けたというニュアンスを伝えられる用法である。英語ではこのような言い方はせず、それぞれ「子供が石を投げて、それが私にあたった」「母が私のためにセーターを編んだ」と表現される。したがってこのような用法は、日本語に特徴的であるといえる。

ではこのふたつの用法に共通するものは何かといえば、それは両方とも利害または利益に関する表現であるということである。受け身の用法で表されるということは、その本人は受け身的な立場にいることを意味する。自分は受け身の立場で相手から利益を受ける、というのは「甘え」の感情で期待される事柄である。土居（1971）によれば、このような利益の授受を示す表現が顕著であることは、明らかに、利益を受けられなかった場合の心理の存在を暗示しているという。利益を受けられない心理を、これも外国語には翻訳しづらい語だそうだが、「被害感」という語で土居は説明している。この「被害感」が実際以上に顕著に感じられたり、非現実的な被害感を感じるという状態は、分裂病の症状である。他人のささいな言動を過大に受け止め、相手は自分のことをひどく責めていると思いこみそれにとらわれるのが「被害妄想」であり、自分は何か大きな罪を犯したと思いこみそれを償わなければという気にとらわれるのが「罪業妄想」である。このように「被害感」は、現実検討能力を伴わないと分裂病の諸症状へとつながる。そして「子供に石を投げられた」「母にセーターを編んでもらった」のような「・・・された」「・・・てもらう」、または「・・・してあげる」のような、利益の授受を示す表現が頻繁に用いられる日本語の文法構造は、「被害感」を容易に生み出す土壌を形成しているのである。

ここまで、精神障害を語る上での日本語の持つ諸特徴について、語彙面と文法面から考察し、それと「甘え」との関係性を述べた。

ところで実際に、成長過程において「適切な甘え」を経験しないでいると、どのような弊害があるのだろうか。それらの弊害を概括すれば、「適切な甘えを経験しなかった者は、成長してからも適切に甘えることができにくい」のである。それは例えば前章の「甘えとナルシズム」でも述べたように、ナルシスティックなしばしば自己中心的に見える態度でしか甘えられなかったり、また「甘えとアンビバレンス」で述べたように、アンビバレントな複雑な気持ちを表現することでしか甘えられなかったりする。

また「甘え」の源泉は、既に述べたように母子分離の不安感である。しかし逆説的にみえるようだが適切な甘えを体験すると、子供は安心して母親から離れられるようになる。それは母親との結びつきを確信しているからで、たとえ母親から一度離れても、また戻ったときに自分は再び母親に受け入れてもらえる、という自信があるからである。しかし成長過程において適切な「甘え」を

経験しないしていると、子供は母親からいつまでも離れられなくなる。その一例が、「人見知り」である。そのまま大人になると、時に「人見知り」は対人恐怖症に発展することもある。

母親との結びつきを確信することができると、子供はそこで一種の所属感を味わうことができる。この「所属感」を経験しないまま成長すると、大人になっても何らかの集団にうまく所属できなくなる。それは例えば集団に呑み込まれてしまったり、もしくは集団から孤立してしまうといった、極端な二つの場合が考えられる。この二つは対極にあるようだが、集団と自分の間のバランスがうまくとれないという点では共通している。このような状態は「自分がない」という言葉で表現されることがあり、それが病的になると、「誰かに操られている」「自分の心がつかめない」などの重大な自己喪失感となる。

熊倉・藤山・生地(1997)は、治療後の患者に「今まで私には自分というものがありませんでした」と訴える者が多いことに着目し、「自分がない」という状態について次のように考察している。つまり成長過程において適切な甘えの経験をしなかった者は、それに伴う所属感も経験せず、そのことが、大人になってから集団などにうまく所属することができない原因となる。それがなぜか患者は初めは分かっていないのだが、治療者の元に通い「適切な甘え」を治療者と共に経験するにつれて、「自分は治療者に受け入れられている＝自分がある」ことを感じ始め、同時にそれまでは「自分がなかった」ことに気づくのである。

また土居(1971)は、「自分がない」という表現が生まれる理由として、日本語においては主語がしばしば省略されるという点を指摘している。しかしだからといって、欧米語話者が同様の自己喪失感を経験しないかということ、そうではないという。ただ日本語の場合は一人称が省かれる傾向にあるために、かえって「自分があるかないか」ということが鮮明に意識されるようになったのではないかと述べている。

6) 「甘え」という語の存在

ここまで述べてきたことから、「甘え」とその周辺の語彙は日本語に特有のものであるが、その心理は普遍的なものであること、は既に明らかである。ではなぜ日本語に「甘え」とそれに類する語があるかということ、日本の文化や社会が「甘え」を受け入れる性格を持つからである。ここで、「はじめに」の章で述べた疑問が再びおこる。すなわち文化が言葉を作り出すのか、それとも言葉が文化を作り上げるのか、という疑問である。「甘え」に関してその疑問を

より具体的にすれば、日本文化の性格がもともと「甘え」を受け入れるものであったのか、それとも「甘え」の語が使用されることにより「甘え」を受け入れる文化が作り上げられていったのか、ということである。

言語と文化の間に「関係がある」として研究を進めた学者に、エドワード・サピアがいる。言語活動に対するサピアの仮説は、後にサピアの説を受け継いで研究を続けたベンジャミン・リー・ウォーフの名前と併せて、「サピア・ウォーフの仮説」と呼ばれる。「サピア・ウォーフの仮説」は一言でいえば、「言語と人間の経験の様式には関係がある」というものである。「人間の経験の様式」とは何かというと、それは人間の活動一般を指しているが、要するにそれらの根本にある思考の様式のことである。サピアは、言語と思考の間には密接な関係があるとし、人が思考するときや互いに交流するときには必ず言語を用いねばならず、その形態はある程度言語の特徴によって規定されるとし、それを「思考は言語の溝を通る」と表現している。

したがってある特定の言語を用いる集団に属する人間は、それぞれある程度同様に規定された様式で思考するということがいえ、そのことは集団に属する人間のパーソナリティにある一定の傾向を与え、その集団内の文化にもある一定の傾向を与える、とサピアは仮定している。しかし一方でサピアは、複数の言語とその文化を類型化した結果、言語の構造は類似していても文化の共通点は少なかったり、逆に言語の構造は全く異なっても文化に共通するものが多く見られる例があることを指摘し、「言語と文化は対応している」ではなく「関係がある」と述べるに留めている。

また言語が形成する思考のパターンは、無意識の内に思考に影響を及ぼすとサピアは述べている。したがってサピアの言語論は、心理学と深い関係を持つといってよい。しかし無意識の構造や機能さえ、今日仮定の領域を出ず明らかにはなっていないことを考えると、心理学がより発展しない限り、サピアの説も仮説の域を出ないといえる。

ここで初めの疑問に戻って考えると、サピアの説はそれぞれの疑問に次のように答える。なぜ「甘え」の語が存在する言語と、存在しない言語があるか、言い換えればなぜ言語に多様性があるのかということ、先史時代に各民族の無意識もしくは直感が経験を性急に範疇化し、これを変えることを許さず、後世の人間にその範疇を強制的に課したからである。そしてそれらの言語の構造は、ある一定の美学的な要素を持つために、他の言語をもつ文化と交わっても無秩序には変化することはなく、変化の仕方にはある一定の傾向がある。また言語は、その性質から無意識の内に思考の様式に影響を与えるので、「甘え」の語をもつ言語を使用する民族が、「甘え」に敏感な社会を形成する、つまり「甘え」の言語の存在が、日本人のパーソナリティにそのような影響を与えたとい

うことは考えられる。しかし無意識の機能が明らかになっていない現在では、それは仮説に過ぎないのである。

7) 心理療法の場における「甘え」

「甘え」とは何であるかをこれまで述べてきたが、実際に「日本人は甘えをどのように体験するか」を検証するにあたって、検証の場、つまり心理療法の場における「甘え」について考察しなければならない。そこで、ここまで論じてきた「甘え」についての事柄をまとめると、大体次のようになる。

「甘え」とは「乳児の持つ母親との分離への不安」を、その原型とする。「甘え」は相手への依存欲求に似ているが、それとは別の独立した欲動に基づく。しかし実際に経験される際には他の欲動と結びつき、経験する個人はそれを欲求・行動・感情の3つのレベルで経験する。「甘え」は非言語的な特徴をもつため、第三者からは観察可能であるが、「甘えている」本人がそれを「甘え」とは感じない場合もある。したがって「甘え」は、現象を記述する言葉として使われる。また「甘え」の現象は社会の様々な場面で観察されるが、その現象を分析すると4つのレベルに分類することができる。それは個人の内部の精神力動としての「甘え」、対人関係における相互作用の中にみられる「甘え」、社会的に承認されたやりとりとして表現される「甘え」、言語表現上にあらわれる「甘え」、の4つである。これらは実際には互いに絡み合い、「甘え」の現象を形作っている。

この論文の目的は、「日本人はどのように甘えを体験するのか」を検証することであった。その検証の場に、私は心理療法の場を選んだ。なぜ心理療法の場を選んだかは「はじめに」の章で述べたが、ここで繰り返すと、精神疾患を患うクライアントは土居氏によれば何らかの形で満たされない甘えを経験しているので、甘えの感情を一般の人よりもより表出しやすい状態にあると推測したからであり、またセラピストであれば一般の人々よりも「甘え」に敏感だと考えたからである。

では心理療法の場において、「甘え」はどのように体験されるのだろうか。「甘え」は日常語であるため各人でその感じ方は違うであろうことと、「甘え」それ自体は非言語的なものであり、あとからその現象を記述する際に用いられる語であることを考慮すると、「甘え」の体験は広範囲にわたると予想される。しかし場を「心理療法を行うセラピストとクライアントの2者間」に限定し、あえて甘えの体験を類型化するとすれば、おそらく次のように2つに分けることができると私は考えた。

ひとつは、日本人の日常生活によく観察される「言わなくても分かってもらえるだろうと期待する甘え」である。なぜこのような期待を日本人は持ちやすいか。それには、日本が単一民族で構成された島国であることと、また宗教観に基づく人間観等から生じる、「わたしとあなたは基本的には同じ」という無意識裡の観念の存在が、関係していると考えられる。さらに謙遜の表現などの、すでに習慣化された、相互のコミュニケーションにおける儀礼的なふるまいが定着していることも、理由のひとつであると考えられる。そして何より、「甘え」を肯定する社会化の過程を通して学習された、「互いに相手の好意を期待しあえる」という暗黙の了解が存在するからである。

もうひとつは、転移感情として現れる「甘え」である。つまり、以前満たされなかった甘え感情が治療の場で再び表出されることである。甘えの感情は表面的にはセラピストに向けられるが、実はその対象は母親であったり、父親であったり、配偶者であったりする。はじめの「甘え」においては、甘え感情が純粋にセラピストに向かっているのに対して、ふたつめの「甘え」はセラピストを通してセラピスト以外の誰かに向けられている。それゆえ転移と解釈される。

しかしここで注意しなければならないことは、前者の甘えと後者の甘えは相互に関わり合っているということである。例えば次のような場合である。セラピストが、ある状況におけるクライアントの心理状態をよりよく理解したいと思い、繰り返しクライアントに質問をする。クライアントはしかし、セラピストが自分と同性であり同年代であり、また心理療法家というところの専門家であることに対する過度の期待感から、相手には自分の状態が「分かるはずである」と思いこむ。そして何度も質問を繰り返し、自分で説明させようとするセラピストに対して失望し、質問へのそれ以上の回答を拒む。このような場合、それはクライアントが、純粋にセラピストに対して向けた「甘え」であると解釈できる。しかしもしクライアントが子供時代に、やたらと詮索的な母親に対して不快な感情を持ち続けていたとするならば、かつて母親に対し抱いていた感情をセラピストにぶつけている、つまり転移感情だと解釈することも可能なのである。また、転移感情を持ちながらも、面接場面でセラピストへの純粋な「甘え」を表現することもありえる。なぜならセラピストとクライアント間とはいっても、そこで交わされるのはあくまでも二者間の交流であるから、セラピストへの純粋な「甘え」が向けられることはない、とはいえないからである。

この論文での調査では、これら考えられうるふたつの甘えの体験のうち、前者の「言わなくても分かってほしい」甘えを対象とした。その理由はふたつあり、ひとつは、転移感情としてあらわれる甘え感情がより一般的・普遍的であるのに対して、「言わなくても分かってほしい」甘えは日本人の生活習慣を反

映したものだからである。もうひとつは、転移感情と共にあらわれる「甘え」感情をとりあげるとすると、「甘え」で解釈できる現象の範囲がとても広くなってしまいう可能性があり、調査をする上で不適當と考えたからである。

では「言わなくても分かってほしい」という甘えは、日本人相手の心理療法において本当に観察されうる現象なのか。欧米の心理療法においてはみられない、日本人の心理療法に特徴的なものなのか。鑪（1998）は、日本における心理療法と欧米のそれとの比較から、その違いをいくつかの項目に分けまとめている。彼のまとめによれば、欧米における心理療法は日本における心理療法に比べ 精神内への関心を高めることによって主体的に問題を解決しようとする、そのためことばへの依存が高い、 内的な状態を言語化することで表現しようとする、 受け身性と依存性を排除して自律的な生活をその目標におく、 対人関係の場の力動的バランスよりも自己にとっての真実は何かに注目する、 といった傾向があるという。

また渋谷田（1991）と Linda G. Bell(1991)は、それぞれ日本とアメリカでの臨床経験をもとに、その違いについて次のように述べている。渋谷田は、アメリカのクライアントと日本のクライアントの違いに注目している。アメリカ人のクライアントは、自身の問題について「なぜだろうか？」と論理的に答えを求め、かつよりよい治療法を自ら積極的に求める傾向があるのに対して、日本人のクライアントはむしろ、「どうしたらいいのでしょうか？」と問いかけてくる傾向があるという。また同じ内容の感情表現をしても、英語では主語がはっきりした明確な感情表現となるのに対して、日本語では必ずしも主語が明確でなく、誰がどのような感情を持っているのかが曖昧な表現になることもある。なぜなら、日本語で英語のように感情を直接的に表現すると、自己中心的なイメージを与えることがあるからであり、また、ひとつの表現の中に、自分の感情に加えて同時に周囲への気遣いなど、場の和をはかるための表現を組み入れることが可能だからである。一方 Linda G. Bell は、セラピストの対応の違いに注目している。彼女によれば、日本人のクライアントへ共感を示すためには、言葉の裏を汲みとることができなければならず、たとえそれができなかったとしても理解したかのように振る舞わなくてはならない、という。アメリカの治療者も直感に頼ることがないわけではないが、それは主に仮説を立てるためであり、しかもそれは患者に直接的に言葉で「確認」されたものである。大学教授である Linda G. Bell は、患者や学生に対して他人の心は読めないものと教えるという。相手が何を考えているか知りたければ、その人にたずねてみなければわからないし、あなたが何を考えているのか知ってもらうためには、伝えなければならぬ、と教え、彼女はアメリカ人相手にそのようなスタンスで心理療法を行っている。

アメリカと日本の心理療法の実際についてのこれらの報告から、アメリカではクライアントの言語化を重視するのに対して、日本では必ずしもそうではないことが分かる。したがって、日本の心理療法の場は、「言わなくても分かってほしい」という「甘え」を排除するような性格のものではないといえ、そのため、日常の人間関係にみられる「甘え」がそのまま、心理療法の場にも持ち込まれることが考えられるのである。しかし「言わなくても分かってほしい」という「甘え」は、心理療法の場ではいつも満たされるとは限らない。なぜなら、面接形式の心理療法においてはまずセラピストがクライアントを理解せねばならず、そのための言語化作業が必須のものだからである。そのような時、セラピストはクライアントの「言わなくても分かってほしい」の「甘え」に、どう対処するのだろうか。もしそこで、セラピストがクライアントの「甘え」をうまく受けとめられなかった場合、土居氏の理論によればその甘えは「屈折した甘え」となり、その後の心理療法に何らかの悪影響を及ぼすと予想される。

8) インタビュー調査による仮説の検証

8-1 インタビュー調査の目的と構成

これまで述べてきたことを踏まえて、私は次のような仮説を立てた。

<日本人のセラピストが行う日本人相手の心理療法では、セラピストはクライアントの、「言葉で説明しなくても分かってもらいたい」という日本人に特徴的な「甘え」を、頻繁に体験する。もしセラピストがそれを「甘え」として意識していなくとも、セラピストが日本語母語話者であるならば、その現象を「甘え」の語で記述することが可能である。そして「甘え」をうまく受けとめられなかった場合には、そのことが何らかの形で、その後の心理療法に悪影響を及ぼす>

この仮説を検証するために、セラピストを対象としたインタビュー調査を行った。インタビュー項目は、次の通りである。

クライアントがセラピストの質問に対して、その解答を拒否したり、または反論してきたことがあるか？

明確化や直面化を促すため本来ならばクライアントにするべき質問を、あえて避けるのはどのような時か？

明確化・直面化にふみきるのはどのような時か？

明確化・直面化の仕方は？

日本人相手の心理療法と、欧米人相手の心理療法に違いはあるか？あるとすればそれはどのようなものか？

「言わなくても分かってほしい」という「甘え」はどのくらい体験するか？

「言わなくても分かってほしい」という「甘え」を体験した事例は？

土居健郎の「甘え理論」は、心理療法を実践するうえでどのような意義をもつか？

なぜインタビュー調査にしたかということ、「甘え」は日常語であることから、個人によりその捉え方が異なると考えたからである。したがってこの調査では、セラピストの主観で自由に、「甘え」の体験について語ってもらうのがその目的であり、そのためにはインタビュー調査が適当だと判断したからである。

今回の調査では、「言わなくても分かってほしい」という感情を「甘え」のひとつとしてとりあげるが、対象者のセラピストがそれを必ずしも「甘え」とは感じないということも考えられる。そこで、私の考えるこの「甘え」を、対象者が体験するのは具体的にどのような時か予め予想し、まずはそのような体験をしたことがあるかを質問によって明らかにする。それが質問である。「言わなくても分かってほしい」甘えは、具体的には、クライアントによる質問への解答拒否や反論によってあらわれると予想した。次に、そのクライアントの「甘え」に対しセラピストがどう対処するかの質問が、からである。対処の方法に「明確化・直面化」という用語を充てたのは、質問への抵抗、という形態をとってあらわれる「甘え」に対するセラピストの対処方法には、一般に「明確化・直面化」とよばれる、言語化の作業が考えられるからである。そしてその次に、対象者が日本人以外のクライアントに心理療法を行った経験がある場合は、日本人相手とそうでない時の違いを語ってもらう。それが質問である。ここでは、既に引用した渋沢田や Linda G.Bell の見解と同じような答えを予想している。からまでの質問の目的は、それらの質問を通じて、クライアントの「質問への抵抗」に対する意識を、対象者のセラピストの中で高めってもらうことである。

その後、「質問への抵抗」の背景として、「言わなくても分かってほしい」とクライアントが考えている可能性があることを指摘し、私はそれをクライアントの「甘え」だと考えていると伝え、対象者のセラピストがどのくらいの頻度で同じような印象を持つか尋ねる。またそのような印象を持った事例を挙げってもらう。それが質問とである。

最後に、土居健郎の「甘え理論」は、対象者のセラピストの心理療法の実践において、どのような意義を持つか尋ねる。これは「甘え理論」がそのセラピ

ストにとってどのような位置を占めるかを知ることで、インタビュー結果の考察に役立てたいと考えたからである。

8-2 インタビュー調査の結果

インタビュー調査は、2人の女性セラピストを対象に1人ずつ行われた。それぞれ静かな室内で行われ、時間は2回とも1時間程度である。セラピスト個人の情報は、性別、カウンセリング歴、カウンセリングの対象者、主に依って立つカウンセリング方法を載せた。インタビューの解答内容については、対象者が抵抗なく答えられるよう配慮し、その場で録音はせずにメモをとるに留めた。したがってここに記載されたものは逐語記録ではなく、対象者の用いた言葉を使い要点を変えないように、解答内容をまとめたものである。

8-2-1 インタビュー調査<1>

- ・性別 女性
- ・カウンセリング歴 35年
- ・カウンセリング経験 全ての年齢層（学生・高齢者も含む）
欧米人若干、韓国人若干
- ・カウンセリング方法 精神分析的な心理療法

クライアントがセラピストの質問に対して、その解答を拒否したり、または反論してきたことがあるか？

- ・いつも、ほとんどの場合はそういう反応がある。
- ・それはいわゆる「抵抗」であり、まさにそれを中心としてセラピーはすすめられる。

明確化や直面化を促すため本来ならばクライアントにするべき質問を、あえて避けるのはどのような時か？

- ・タイミングの悪いとき（周囲の環境、情緒的状态）
- ・症状でいえば、例えば分裂病者の状態の悪いとき、またはナルシシズムの強い、他の人のいうことはおかまいなしのクライアントが相手のときなど
- ・冷静に自己観察ができないとき（幻聴のあるときなど）
- ・感情がたかぶっているとき
- ・たくさんしゃべり続けるとき

・（対象者によるまとめ）質問（直面化）が情緒的に混乱をきたす恐れがあるとき

明確化・直面化にふみきるのはどのような時か？

・直面化すべき内容が、本人の意識にのぼっていると判断したとき

明確化・直面化の仕方は？

・解釈を「食べやすく」させるために、本人の不安や防衛も合わせて解釈する

日本人相手の心理療法と、欧米人相手の心理療法に違いはあるか？あるとすればそれはどのようなものか？

・欧米人や韓国人の方が、セラピーとはどういうものかという理解度が高く、自分の問題を意識しながらやってくることが多い。セラピーの進行についてカウンセラーと話し合ったりもする。問題の内容を自発的に話す。

・一般的に日本人相手のセラピーは、よりサポータータイプ（支持的）にすすめられる。日本人は比較的、セラピーに来れば問題が解決するのでは、という漠然とした期待を持って来る傾向がある。（欧米人と比較した場合）

「言わなくても分かってほしい」という「甘え」はどのくらい体験するか？

・「言わなくても分かってほしい」という感情を、「甘え」として特に意識したことはなかったので、よく分からない。ただし「質問への抵抗」がそれと同じだとすれば、そういったことは常に体験している

「言わなくても分かってほしい」という「甘え」を体験した事例は？

40代女性のケース 主婦 家族構成・・・公務員の夫、小学生と中学生の子供の4人

・主訴 ストレスによる情緒的不安定、来所時は少しうつ状態、ナルシスティックな傾向

・ストレスの内容（本人による） 自分は「いい母親になりたい」と思い家族のためにいろいろしているのに、家族はそれを分かってくれない。小学生の子が学校へ行きたがらないなどの問題を抱えると、それにふりまわされる。家のことと以前していた仕事（保母）を両立できないと思って、仕事をやめたのに、それにもかかわらず家庭では自分のペースを保つことができない。

・症状と経過 家で何か問題が起こると、すぐにカウンセラーに興奮した様子で電話してきたり、診療所に向けこんだりと、情緒的に不安定な状態だった。そこで当カウンセラーの元に来所。はじめはうつ状態がみられた。カウンセリ

ングでは子供や夫の不満を語り続け、自分はいい母親になろうと努力しているのに周囲がそれを分かってくれないと訴える。カウンセラーが「家族が**さんの努力を分かってくれないのですね。早くわかってもらえるようになって、**さん自身のペースが取り戻せるようになりますといいですね。」などと支持的な反応を返すと、涙ぐみ、「そうなんです、家族は分かってくれないんです。」「自分のペースでできないんです。」などと返答した。さらに仕事を辞めたことに対する後悔、本当は夫のような堅実な男とではなく、もっと情熱的な人と結婚したかったこと、なども訴えた。家庭では、不満をもらしながらしかし家のことが思うようにできない妻に対して、夫はその矛盾を指摘し、夫婦間ではたびたびぶつかり合いが起きていた。妻は離婚し家を出たいと言っていたが、経済的な事情もあり、また一人でやっていく自信もないと言い、離婚には踏みきらなかった。

クライアントは、その後初来所時から1年半の間、2週間に一度きちんと通い続けた。そして家族間の関係が少し安定してきた時、妻は福祉職の資格を取ることに成功した。そのことが妻の自信につながったようであった。だが、その後突然に、クライアントはカウンセラーに、「先生に話を聞いてもらっても結局分かってもらえない。分かってもらえないのだから、もうここには来ません。」と怒り口調で言い、それ以来まったくセラピーには来なくなった。

<当セラピストの見解に基づく、この事例における「甘え」の解釈>

このクライアントは、カウンセラーに「何を」分かってもらえなかったと思ったのだろうか。セラピー中の支持的反応に対する応答は、「カウンセラーの言うとおり」というものだったのかかわらず、なぜクライアントは「分かってもらえなかった」と思うに至ったのだろうか。それについて、次のような解釈ができる。

クライアントはカウンセラーに、「自分の実力、本当の自分、自分の可能性」を分かってもらえなかったと思ったのではないだろうか。自力で独立のための資格を取り、クライアントは自信をつけた。それがクライアントにとっては問題の直接の解決につながる(と考えられる)のに、1年半も通ったにもかかわらずカウンセラーから「自立をこのように目指したら」という助言がなされなかった。このために、結局自分のみで問題を解決した=カウンセリングは役に立たなかった=結局カウンセラーは何も私のことを理解していなかったという図式がクライアントの中にできあがり、それが最後の言葉として表現されたのではないだろうか。

(精神分析的・共感的な)心理療法においては、問題解決のための具体的な方策を指示することはない。クライアント側からの働きかけには応じるが、そ

の時でさえ、積極的にある特定のやり方、特定の選択肢をすすめることはしない。セラピーのこの特性がクライアントの最後の反応を呼び起こした、ということは考えられないだろうか。仮に場面をカウンセリングではなく、近所の世話やきおばさんとの対話に移して考えてみる。そこでは、カウンセリングほどに（適切な）共感は得られないかもしれない。しかし世話やきおばさんは、あれこれとクライアントに助言を与えると考えられる。かつそれは具体的なものである可能性が高い（例えば、料理学校に通えば、とか、知り合いのところで事務員を探しているのだけどやってみない、等）。

家庭の状況が安定しない初期のころ、クライアントは確かに支持的な理解を求めていたと推測される。それゆえに、涙ぐみながら自分の努力を訴えていたのではないだろうか。言い換えれば当時のクライアントは、自分の考え方を支持してくれる人を求めていたのである。その相手として、カウンセラーは適当だった。しかしクライアントはそれに加えてさらに、世話やきおばさんのような助言を期待していたのではないだろうか。自分の考え方を支持してくれるのだから、当然私のことを分かってくれているのであり、私のことを分かってくれているのなら、私が今望んでいること、自立のための方法も、きっと一緒に考えてくれるに違いない。このような、通常の間人間関係にもみられる「甘え」の感情を、セラピーの性格を理解していなかったクライアントは、セラピーの場にも持ち込んだ。だが、そのような期待はセラピーの場では叶わないことを知ったクライアントは、自分で資格を取る。この体験が、クライアントのセラピーへの失望につながったのではないだろうか。

クライアントのナルシスティックな性格も相まって、その結果、初期には自分の葛藤を「分かってくれた」カウンセラーに対して、最後には結局自分のことを「分かっていたいかなかった」、と怒りをぶつけたのではないだろうか。それはつまり、「自分のことを」分かっていたいかなかったのではなく、自分がカウンセラーに対して持っていた「私があえて言わなくても、この人なら私の気持ちを察して向こうから援助の手をさしのべてくれるだろう。」という「甘え」を分かっていたいかなかった、とクライアントは言いたかったのだと考えられる。

土居健郎の「甘え理論」は、心理療法を实践するうえでどのような意義をもつか？

・当セラピストはもともと精神分析を軸にセラピーをすすめているので、もともと他の理論に基づき心理療法を行っていてそれから「甘え理論」を知ったのではない。いわば彼女の依って立つ理論の基礎に土居健郎の理論もあるといえるので、この質問は適当ではない。

8-2-2 インタビュー調査<2>

- ・性別 女性
- ・カウンセリング歴 4年
- ・カウンセリング経験 全ての年齢層（精神病院勤務経験有）
定時制男子高校生、進学校の高校生、中学生、
児童養護施設
日本人以外のカウンセリング経験はない
- ・カウンセリング方法 短期療法（終結まででいたい2-3か月。短いと2、3回。長くても10回程度の面接で終結。ただし入院患者を除く。勤務場所柄、緊急性の高い危機介入を必要とするケースを担当することが多い。）

クライアントがセラピストの質問に対して、その解答を拒否したり、または反論してきたことがあるか？

- ・ほとんどない
- ・答えられないような質問はしない
- ・あまり相手の感情に対してつっこんだ質問はしない
- ・質問の内容が未来志向なので、“答えたくない”という反応は返ってこない・質問の内容が「いつ、どこで」といったような具体的なものが多く、それらは“答えられない”質問ではない

<クライアントが質問に反論してきた事例>

境界例の患者。はじめはうつ状態を呈していたが、カウンセリングを深めていくにつれ、周囲との距離がうまくとれずにいる境界例の症状が現れてきた。はじめてしばらくたったころから、薬を勝手にやめたり、カウンセリングの進め方に反発してきたり（2人のカウンセリングで進めていくことの承諾を得ようとした時の質問に対して反発）と、カウンセリングの場での主導権を得ようとするようになった（カウンセラーの表現では、自分で治療構造を決めたがった）。それに対して当カウンセラーは、あくまでもカウンセラー側の決めたとおりに進めていく意志を伝えた。その後、クライアントとの間に険悪なムードが漂ったものの、クライアントはその後のカウンセリングに続けた。カウンセラーの解釈では、何事も自分の思うとおりに進めていきたいという態度は、それ自体クライアントの症状であり、たとえクライアントの意志がすべて尊重

されなくても、カウンセリングの場はクライアントにとって必要なものであったから通い続けたのだ、という。

明確化や直面化を促すため本来ならばクライアントにするべき質問を、あえて避けるのはどのような時か？

- ・重いつつ状態のとき（会話自体をあまりしないようにする）
- ・本人の状態が不安定なとき
- ・本人が、何かを考えられるような状態でないとき
- ・自尊心が高く、周囲に見栄をはるようなクライアントのとき

> 具体的な内容に対する質問であっても、それが自分の評価を下げようような内容である場合、答えたがらない。こういう場合には、質
築
点
問はあえてせずに、2・3回カウンセリングを重ねラポールをき、質問をきりだすタイミングをみる。たいていは自然に問題が明らかになる。

明確化・直面化にふみきるのはどのような時か？

・未来志向の質問、症状に焦点をあてた質問が基本なので、過去の事実の理由を探りだそうとしたり、対人関係の葛藤を明らかにしようとしたりはしない。

> なぜか？ 例えば・・・クライアントの状態がよい時に話す過去の体験と、状態が悪いときに話す過去の体験が、まったく別の見方
でとらえられている場合があるので。

明確化・直面化の仕方は？

- ・明確化・直面化と呼ばれる作業自体をしないので、省略。

日本人相手の心理療法と、欧米人相手の心理療法に違いはあるか？あるとすればそれはどのようなものか？

- ・欧米人相手に心理療法を行ったことはないので、省略。

「言わなくても分かってほしい」という「甘え」はどのくらい体験するか？

・「言わなくてもわかってほしい」を「甘え」と感じたことはなく、当カウンセラーにとっては、どちらかという、しゃべらせてくれ、聞いてくれ、というクライアントの態度を「甘え」と感じるという。

「言わなくても分かってほしい」という「甘え」を体験した事例は？

- ・質問に対して、「先生には、言わなくてもわかってるんでしょ」と返された

ケースがある。ただ、それを当カウンセラーは「甘え」とは認識してはいない。カウンセラーを「専門家」としてみていたゆえに出た言葉である、とは考えられる。

土居健郎の「甘え理論」は、心理療法を实践するうえでどのような意義をもつか？

・クライアント理解のひとつの視点だが、具体的なカウンセリング方法についてはあまり関係がない。

8-3 考察

今回の調査の目的は、「日本人はどのように甘えを体験するか」を明らかにすることであった。検証の場には、「甘え」の感情ががより現れやすいと予想される心理療法の場を選んだ。そして、「甘え」として経験される数多くの事柄のうち、日本人に特徴的と予想される「言わなくても分かってほしい」という「甘え」をとりあげた。「言わなくても分かってほしい」という「甘え」の実際に迫るため、具体的には、セラピストはクライアントの「言わなくても分かってほしい」という甘えをどのように、どの位体験するのか、「言わなくても分かってほしい」という甘え感情は、本当に日本人に特徴的なものなのか、「言わなくても分かってほしい」という甘え感情が適切に受け入れられないと、どのような弊害をもたらすのか、の3つの観点から質問を構成し、セラピストへのインタビュー調査を実施した。

調査により明らかになったことは、2つある。

ひとつは、「甘え」が日常語であることから、セラピストによりその捉え方が異なるということである。どちらのセラピストも共に、私の提起した「言わなくても分かってほしい」という感情を、「甘え」とは捉えていなかったようである。調査の趣旨を説明するために、質問の後私の考える「甘え」について説明したところ、調査<1>のセラピストはそれを「甘え」として受け入れられると答えたが、調査<2>のセラピストは、「私の話を聞いて下さい」という一見正反対の感情を「甘え」と感ずると主張し、私の「甘え」解釈を受け入れなかった。

なぜ私の「甘え」の解釈は、調査<1>のセラピストには受け入れられ、調査<2>のセラピストには受け入れられなかったのだろうか。その理由としては、それぞれのセラピストが依って立つ心理療法の理論の違いが考えられる。調査<1>のセラピストは精神分析的な心理療法を行っているため、もともと精

神分析学者である土居健郎の「甘え理論」は、彼女にとって重要な基盤ともいえる理論である。したがってそこで述べられているような事柄は、彼女にとってなじみのあることがらであるので、甘え理論から導かれた私の「甘え」解釈は、受け入れられるものなのである。それに対し調査<2>のセラピストは、短期療法を行っている。短期療法では、クライアントの内的世界よりも、問題となっている症状自体に焦点をあててセラピーをすすめていくため、クライアントの感情に深く切り込むような質問はされない。また、触れられたくない過去について質問されることもなく、自分の体験や感情についての「解釈」もされない。したがって、少なくとも「質問への抵抗」というかたちで、「言わなくても分かってほしい」という感情を体験することは、あまりないのである。

調査により明らかになったもうひとつの点は、日本人相手の心理療法と日本人以外が相手の心理療法では、そのすすめられ方が異なるらしいということである。では、どのように異なるのか。2人のうち、日本人以外に心理療法を行った経験のあるのは、調査<1>のセラピストだけであった。彼女がいうには、欧米人や韓国人はより自発的・積極的に、セラピストと問題を解決していこうという姿勢で、心理療法にのぞむ傾向がある。それに対して日本人は、セラピストの所に来れば問題が解決するのでは、という漠然とした期待を持っている傾向があるという。彼女のこの意見は、日本人が「セラピストの元に来ればなんとかしてもらえるんじゃないだろうか」、という感情を持ちやすいことを示唆している。それはつまりセラピストへの依存であり、相手に期待する、という点から「甘え」感情であるといえる。日本人のこの「傾向」が、そのまま「言わなくても分かってほしい」という感情につながるとは断言できない。しかし少なくとも、「セラピストへの期待」を持つ傾向があるということは、それを「甘え」とすれば、「甘え」が実際に心理療法の場に持ち込まれるということを表している。「甘え」が持ち込まれれば、「甘え」をその背景にもつ「言わなくても分かってほしい」という感情が生まれやすい、と結論することができるだろう。

では「言わなくても分かってほしい」の「甘え」を、セラピストはどのように体験するのか。調査<1>のセラピストには、「言わなくても分かってほしい」という感情に出会った事例を、1つ挙げてもらうことができた。その事例のクライアントは、結果的にそれまでの面接が無駄だったと言って、最後は心理療法の中断という形で終結している。なぜクライアントがそれまでの面接を無駄だと感じたのか、心理療法がそのような終わり方をしたのか、の解釈は事例の後に載せたが、それは、「言わなくても分かってほしい」という「甘え」の心理で説明できるものであった。また、その事例の一連の出来事が、調査<1>のセラピストにとって、クライアントの「甘え」のあらわれであると捉え

られるかどうか尋ねたところ、「甘え」と解釈することもできる、との答えが返ってきた。

調査<2>のセラピストも、「先生には、言わなくても分かってるでしょ」と返された経験があるという。しかしその反応は、彼女にとっては「甘え」とは映らない。その一方で、クライアントのその言葉は専門家としてのセラピストへ向けられた、という解釈には同意している。専門家としての自分へ向けられた「言わなくても分かってるでしょ」という言葉は、「先生なら分かるはず」と言っているのと同じことである。「言わなくても先生には分かっている」というのは、まさに私の考える「甘え」である。自分から言わなくても、先生にはきっと分かっている。それは確信された事柄ではなく、推測された事柄である。その裏には、私の考える「言わなくても分かってほしい」という「甘え」が存在するとも解釈可能である。ただ、調査<2>のセラピストにとっては、「言わなくても分かってほしい」という感情自体が「甘え」ではないので、彼女はクライアントのこのような反応は、「甘え」とは捉えないのである。

調査<2>のセラピストにとって、「言わなくても分かってほしい」という感情が「甘え」ではない理由は、2つ考えられる。ひとつは、セラピストとして短期療法を行っているので、既に述べたように抵抗を受けるような質問をあまりせず、したがって「言わなくても分かってほしい」という感情をクライアントがあまり持たない、と考えられることである。もうひとつは、調査<2>のセラピストが、日本人以外のクライアントを相手に心理療法を行ったことがないことである。日本人と日本人以外の比較対照をしたことがないので、日本人にとって自明であり習慣ともいえる「言わなくても分かってほしい」という「甘え」が、彼女にとっても自明のものになっており、それがとくに「甘え」であるとは意識されないのではないだろうか。意識されないだけであって、実際の心理療法の場面では、日常生活でそうするように自然に相手の「甘え」に接し対応している、と考えられるのである。

以上が、インタビュー調査の結果についての考察である。「甘え」とはどのようなものかを調べていくと、その現れ方は様々なことが分かるが、このインタビュー調査でその一端が明らかになった。「甘え」は学術用語ではなく日常語であるため、その捉え方は人により異なるが、少なくとも土居健郎が定義する「甘え」が、日本人以外よりも日本人に顕著に見られるものであることが分かったのが、この調査のひとつの成果だといえる。

インタビュー調査の行い方について、次の点に反省しなければならない。今回私は、「質問への抵抗」の具体的な例を挙げてもらいながら、それが「言わなくても分かってほしい」という「甘え」感情につながるように、インタビューを進めていくつもりだった。しかし、対象者の「甘え」の捉え方が私が予想

していたものと違っていたので、セラピストにとって、「質問への抵抗」と私の考える「甘え」がうまくつながらなかったようである。そのため答えの内容が無関係な方向へ向かうこともあり、とくに調査<1>のインタビューでは、最終的に私の考える「甘え」へと視点が絞られるまで、随分時間がかかってしまった。もし、はじめに私の考える「甘え」を対象者に理解してもらい、それが対象者にとっての「甘え」であるかどうかは問題にせずインタビューを進めていけば、「言わなくても分かってほしい」という感情について、より豊かな内容の解答を得られたかもしれない。

<参考文献>

- ・ 『精神分析』 土居健郎 1988 講談社
- ・ 『「甘え」の構造』 土居健郎 1971 弘文堂
- ・ 『続 「甘え」の構造』 土居健郎 2001 弘文堂
- ・ 『土居健郎選集2 「甘え」理論の展開』 土居健郎 2000 岩波書店
- ・ 『土居健郎選集4 精神療法の臨床』 土居健郎 2000 岩波書店
- ・ 『土居健郎選集6 「心とことば」』 土居健郎 2000 岩波書店
- ・ 『「甘え」理論と精神療法』 土居健郎 1997 金剛出版
- ・ 『「甘え」について考える』 北山修編 1999 星和書店
- ・ 『「自分」と「自分がない」』 北山修編 1997 星和書店
- ・ 『臨床心理学大系 心理療法』より
「文化と精神療法」 北山修 1989 金子書房
- ・ 『メタ言語としての「甘え」』 竹友安彦 1988 「思想」紙
岩波書店
- ・ 『「甘え」と依存』 フランク・A・ジョンソン 1997 弘文堂
- ・ 『社会言語学への招待』 田中春美・田中幸子編著 1996
ミネルヴァ書房
- ・ 『欧米人が沈黙するとき』 直塚玲子 1980
大修館書店
- ・ 『「日本らしさ」の再発見』 浜口恵俊 1988 講談社
- ・ 『治療論からみた退行』 マイケル・バリント 1978
金剛出版
- ・ 『一次愛と精神分析技法』 マイケル・バリント 1999
みすず書房
- ・ 『カウンセリングと人間関係』 辻村英夫・又吉正治 1996 学文社

- ・ 『言語・思考・現実』 B・L・ウォーフ 1993 講談社
- ・ 『サピアの言語論』 平林幹郎 1993 けい草書房
- ・ 『精神分析的な心理療法の手引き』 鑪 幹八郎 1998 誠信書房
- ・ 季刊『精神療法』 1998年第17巻第4号より
 - 『欧米流精神療法と日本の観念』 渋谷田鶴子
 - 『アメリカの治療者、日本の治療者』 Linda G. Bell 中村紀子訳